kindokopr ess.com
www.kindokopr ess.com

天翔け地這う

第四巻　オセロ作戦２

生野以久男

第一章

1

「なにやっているんだ……」

耀はしびれを切らし、声を掛ける。山城はかれこれ一時間も執務机のまえに座ったきり、全然動かないのだ。

彼は山城と一体同化しているものの、身体だけでの一体同化だった。まだ一体同化のレベルが低いのだ。比喩的にいえば、ただ相手の身体のなかにもぐり込んでいるような状態だった。

この男を完全に操作できる程度に一体同化のレベルアップするにはどうすればいいのか。彼は脳の神経回路に入り込んでこの男がなにを考えているのか知ろうとした。だが何度試みてもうまくいかず、とうとうさじを投げてしまったのだった。

「うるさい。邪魔するな」

山城は邪険に突き放す。

彼はせめて、山城が見ているものが見えればいいと思う。目を閉じ、じっとこころを落ち着け、山城の目になり切る。

一瞬、机の天板らしい平面が浮かんだ。そのうえに小さな紙片が何枚か並べてあるように見える。

「なんだ、あれは……」

彼は目を凝らす。紙片にうっすらと灰色の影が写っているように見える。だがなかなか焦点が定まらない。

さらに目を凝らす。だがなにが写っているのか判然としない。それでも次第に灰色の影が人物であるように見えてきた。紙片は誰かの写真らしい。

「この男が見ているのは誰の写真だろうか……」

男は写真をまえにして、一時間も考え込んでいる。一体、なにを考えているのか。彼はもう一度男の脳へ入り込む。

脳の側頭葉が盛んに活動している。記憶をつかさどる部位へアプローチしているのだ。男は古い記憶を呼び戻そうとしているらしい。

「ケン、なにを見ているんだ」

「……」

男は返事をしない。

「なにを思い出そうとしているんだ」

「……」

彼の声が耳に入らないのか、男は微動だにしない。彼は男を揺すってみようかと思った。だが彼はじっとその衝動を抑え、様子を窺う。

突然、ベルが鳴った。男は受話器に手を伸ばす。

「はい、承知しました」

男は椅子から勢いよく立ち上がった。そして大股で執務室を出ていく。

彼は振り落とされないように、男にしがみついた。

2

「ご用でしょうか」

地区代表がぎょろりと目を上げ、執務机のまえに立つ男を見上げた。三

白眼が怪しく光る。
「騒がしかったようだが……」
しばらく、間を置いて、代表はことさら声を落とす。
「はあ、実は……」
山城はじっと代表の目を見た。目だけが異様に光っている。爆発する寸前の目だ。
「……」
代表は口を閉じたままだ。
彼は黙って、咄嗟に一枚の写真を代表の目の前に突き出す。代表は目を走らせ、写真を一瞥しただけだった。だが不意の一瞬の行為は代表の気勢を殺いだ。目から異様な光が消えた。
「実は、車が一台盗まれたので、追跡して取り返してきたところです」
彼は写真を執務机の天板に置きながら、昨夜の出来事を思い浮かべるように、ことさらゆっくり、写真とは全然関係ないことをさらりと言う。
「うむ……」
興味なさそうに生返事し、代表は天板の写真に目を落とす。
彼は代表の目を覗く。もし昨日の出来事が代表の耳に入っているなら、多分、車で逃げ出したふたりを追跡して連れ戻すまでの最初の前半部分だけかもしれない。そのときは数人の部下が関与していたので、その間の情報は筒抜け状態だったのだ。
だがそのあとの夜の高速道路での捕物帳は彼一人だけのいわば自作自演の独壇場だった。たとえこれが洩れていても、直接見聞きした証人はいず、彼が強く否定すれば、すべては通ることだ。
彼は高を括り、じっと代表の目を見る。彼の強い視線を感じているのか、代表は目を机に落とし、写真を見ている振りをつづけている。
ここは我慢比べだ。早く口を開いたほうが負けなのだ。
彼は代表の唇を凝視する。代表が口を開くのを待った。ただ待った。下手に口を開けば、それだけ話の内容が薄まり、かえって言い訳がましく聞こえるだけだ。
代表が目を上げた。目は報告のつづきを促している。だが彼は素知らぬふりを装う。報告は済んでいるのだ。なにも付け加えることはない。そしてやおら机のうえの写真に手を延ばす。
代表は急いで掌で写真を押さえる。
「これは貰っておく」
「そうですか。その女性は一体誰ですか」
「きみには関係ない」
「……」
「（ケン、その写真はママのか）」
突然、耀の声が響く。
「（お前は引っ込んでいろ。代表に聞こえるじゃないか）」
「（心配するな。ぼくの声は外にいる代表には聞こえないのだ）」
「（いいから、黙っていろ）」
彼は代表の目を覗く。
「なにか言ったか……」
代表はしきりに目を動かし、彼の周囲を窺う。
「その女性は一軒家にいたひとじゃないですか」
彼は代表の目を逃れるように身を翻し、よく通る声で言う。
「なぜ、この写真を……。あのとき、撮ったのか」

彼に目を据える。代表はじろじろ見ている。
「実は……」
代表がなぜこの女の情報を欲しがったのか、なんとしても聞き出すのだ。
「なんだ……」
「実は、こどもの手を引いて歩いているところを見かけたんです」
彼は鎌をかける。
「……」
代表はじっと彼の顔を穴が開くほど見ていた。その間、彼はその鋭く突き刺さる錐のような視線に耐えていた。
「（慌てるな。ここは一端、引いたほうがいいぞ）」
「黙れ」
代表の目が一瞬、動いた。思わず、叫んだ声が代表にも聞こえたのか。彼は代表の目を盗み見する。
いつの間にか、代表はいつもの無表情な顔に変わっていた。彼は潮時と感じ、一礼して、踵を返した。

3

「ミサ、ヨウから連絡があったかね」
未佐は日本ブースで椅子を壁際に引き寄せ、スクリーンを見ていた。振り向くと、後ろにハクリが立っている。彼女は久しぶりに会ったように、白髪に白い顎髭の顔をしばらく見つめる。昨日まで行動をともにしたのに、なぜかしばらく会っていない旧い知人に会ったような懐かしさが漂っていた。
「なにも言ってこないの。どうしたのかしら」
彼女は自分の鼻にかかった声に驚き、急いでスクリーンに目を向ける。スクリーンにはKキャンプの施設が映し出されている。
「ヨウはそこにはいないかもしれない」
ハクリは未佐の背後に立って、スクリーンに目を向ける。
「え？」
「あの男はすでに本部ビルに帰っているだろう」
「耀くんも一緒かしら」
「多分……」
ハクリは簡潔に言い、口を閉じたまま、未佐の背後に立っていたが、「で、あのふたりはどうかな」と言い、まえに出て、スクリーンを操作し出した。
スクリーンに見覚えのある湖畔が映し出された。木実子と別れたところだ。
「そろそろ戻ってきてもよさそうなものだが……」
ハクリは口の中でぼそぼそ呟きながら、湖の周囲を丹念に探していく。やはり、木実子たちや車は戻っていなかった。
「木実子さんたちは戻ってくるかしら」
「分からない。行くところがなければ戻ってくるにちがいないが……。あのふたりにどこか行く当てがあるのかね」
「もしかしたら、まえに住んでいたところに帰ったのかも……」
「ああ、産廃処理場が近くにあったところかね。でもあの付近には、『秋野』という表札の家は見当たらなかったが……」

ハクリもふたりが戻っていないか、産廃処理場の付近を探してみたという。というのも、ふたりが姿を消したと知ったとき、多分、体内の発信機を取り出すために外科医を訪れたにちがいないと思った。そして急いで付近の病院を見て回ったが、ふたりを見つけることができなかったのだ。

「どうしてそこだと思ったの……」

「簡単な切開手術でも、そのあとは誰でもしばらく身体を休めたいと思うだろうからね。それでミサとヨウが事故に遭った焼却炉のことを思い出し、その付近を当たってみたというわけだよ」

「そうだったの。でも変ね。分からないはずないと思うけど。一言言ってくれれば、わたしも一緒に行ったのに……」

彼女はしばらく居候していた白い塗装の戸建ての二階屋を思い浮かべる。こじんまりした煉瓦タイル張りの門柱があって、そこにはローマ字の表札が出ていたように思う。だが木実子が家を出て以来、空家になって表札も取ってしまったのだろうか。それとも、人手に渡ってしまったのか。

不意に、木実子と初めて会ったときのことが鮮明に浮かんだ。彼女が土田教授のもとで秘書のアルバイトをしていたときだった。確か、あのとき、教授は「亜木（あき）」というひとが研究室に訪ねてくると言っていたように思う。

「ハクリ、もしかしたら、表札の名字が『秋野』じゃなくて、別のものだったのかも知れないわ」

彼女は必死になって表札の記憶を呼び戻す。ローマ字で表記された表札は古びてしまい、多分「ＡＫＩ」と浮き彫りされていたらしいアルファベット文字も判然としなかった。だが、頭のＡとつぎのＫだけは読み取れたように思う。それでなんの疑問も感じなかったのかも知れない。

「なんだって……」

「耀くんが生まれたので、名字を変えたのかも……」

「どうして……」

彼女は黙って、ハクリをしばらく見つめていた。多分、産まれた子が婚姻外の子であることを知られたくなかったのか、それとも母親に強いられて姓を変えて結婚したかのように装ったのか、そのどちらかだろう。だから、いい加減にこれまでの「亜木（あき）」に「の」を付けて「あきの」とし、「亜木」に代えて「秋野」としたのだろうと思った。だが、彼女は口を閉じたまま、開こうとしなかった。

「一度、あの付近を訪ねてみるわ。木実子さんがいるか確かめてくるわね。それとも、これから行ってみる？」

だがなぜか、彼女はスクリーンから離れる気がしなかった。別れるとき、直ぐ戻るからと告げたのに、木実子が姿を消したことが気になって仕方がなかった。

もし、ハクリが言うように、木実子たちが発信機を取り除くために湖畔を離れたのなら、それが済めば、ふたりは必ず湖畔に戻ってくるにちがいない。あたふたとふたりを探したりせずに、戻ってくるまで待っていたかった。

これから一緒に協力して「黒の集団」に立ち向かおうというのに、なんの断りもなく、木実子が単独行動に出たことが腑に落ちなかった。もしかしたら、ふたりには「黒の集団」に立ち向かう意思もなければ、「天の組織」と協働しようとも考えていないのかもしれない。

それよりも、木実子は彼女が断りもなくずけずけと身体のなかに入り込んでくることを嫌がり、逃げ出したのだろうか。

とにかく、木実子のこころのなかを読めないことが心もとなかった。彼女を次第に苛立たせていった。

「ミサ、ふたりに会ったら、よく話してみようね」

ハクリは彼女の苛立ちを静めるように言い、優しく肩を撫でた。

4

地区代表は山城から奪うように取り上げた写真を執務机の天板に置き、何時間もじっと見据えていた。

頭のなかで、同じ考えが渦を巻いてぐるぐる回りつづける。時折、山城の陽に焼けた精悍な顔が迫ってくる。その都度、彼は顔をのけ反るようにしてやり過ごす。

彼が山城をもう一度思い返した。あの男は訊いたことには応えず、無造作にこの一枚の写真を突き出したのだ。そのうえ、写真の女のことを執拗に尋ねた。なぜだ。なぜそんなことを知りたがるのか。なにか秘密が隠されていると思ったのか。

彼は議長の求めるままに、女の情報を収集しただけだった。このことは誰にも知られてはならないことだった。山城にも教えるわけにはいかない。議長に関連することは何事も一切マル秘扱いなのだ。

もしこの女の情報を欲しがっているのが議長本人だと知ったら、山城はなんと思うだろうか。それにしても、あの男が執拗に聞き出そうとするのはなぜか。あの男はなにかを掴んでいるのだろうか。

彼は女の情報を集めているのが地区代表本人だと思わせておきたかった。だがもしかしたら、女の情報を求めているのは地区代表本人でないことを山城は感付いているのかもしれない。だから、女のことを気軽に何度も尋ねたのだろう。

彼はふと、山城が「女が子どもを連れて歩いていた」と言ったことを思い出した。なぜ、急に、あの男がいままでの態度を変えて、そんなことを言い出したのか。女の産んだ子が事故死したということを思い出したのか。

彼は女に関する情報収集を中止したときのことを思い浮かべる。それは議長の指示だった。指示を受け、彼は直ぐ、中止命令を下した。

だが突然中止命令を受けた山城にとって、それはあまりにも突飛すぎたものだったにちがいない。そのために、かえってあらぬ興味を抱かせることになった。山城はあれこれいろいろ思い巡らせたにちがいない。そして子の事故死の情報によって中止命令が出されたことに気付いたのだ。だから子どものことを言い出したのだろう。

「で、どうする……」

彼は議長の顔を思い浮かべ、慄然とする。山城が「女が子どもを連れて歩いていた」と言い触らし、そのことが議長の耳に入ろうものなら、間違った情報を伝えた上に、秘密漏洩の嫌疑が掛けられることになるだろう。こうなった以上、一刻も早く、山城の口を封じるのだ。

だがもし山城が議長の「回し者」だったら、逆効果だ。墓穴を掘るだけじゃないか。彼は迷った。

地区代表は山城についての情報ファイルを持ってきた小柄の部下を思い浮かべた。そして徐に、秘書を呼んだ。

5

「誰もいないのかしら……」
木実子は玄関のドアノブを回したが、鍵が掛かっているらしく、ドアはびくともしない。もう一度ベルを押して、耳を澄ます。家の中でベルの音だけがいやに響く。
彼女は玄関の横から塀伝いに勝手口へ回る。鉄格子の嵌まった窓のついたドアのハンドルを回し、手前に静かに引く。
ドアを一杯に開く。細身のドアが微かに軋む。長い間締め切ったままだったのか、湿った冷気が頬を撫で、黴びた臭いが鼻を突いた。
「開いたわよ」
彼女は振り向き、玄関のポーチに立っている森野を手招きする。
勝手口から家の中へ入る。誰もいない。居るはずの母貴世の姿がないのはなぜか。
不審に思いながら、彼女はリビングに入り、テラスに面したガラス戸のカーテンに手をかけた。開こうと力を入れた瞬間、その手首が背後から伸びた手でむんずと掴まれた。
「なにするの……」
振り向くと、片目に眼帯を掛けた見かけない大男がもう一方の手にナイフを持って立っている。
「ああ……」
「どうした……」
森野が悲鳴を聞きつけ、飛んできた。
「そばに来るな。女を殺すぞ」
大男は彼女の腕を逆手にとり、捩じ上げる。
「痛い……」
大男はさらに彼女の腕を捩じ上げ、森野を睨む。
「やい、両手を上げて、後ろ向くんだ。言う通りにしろ、さもないと……」
森野に命じ、大男がナイフを木実子の首に付ける。森野は彼女の様子を窺い、にじり寄ろうと身構える。
「さあ、早くするんだ……」
彼女に素早く手錠を嵌めた。手を上げようとしない森野に、大男が苛立ち、ナイフが光った。
「ああ……」
彼女の首筋から血が滲みだした。
「なにするんだ……」
森野が一歩近付く。
「森野さん、言う通りにして……」
彼女に視線を投げ掛けたまま、森野はしぶしぶ両手を上げ、半身に後ろ向く。大男は彼女を床に投げ出し、森野に近付くと、片手で両手に手錠をかける。
その隙に、森野が一瞬身を翻し、大男に体当たりを食わせる。大男はよろめき、ナイフを床に落とし、倒れそうになったが、必死に耐え、体勢を建て直すと、森野に殴りかかり、足払いを食わす。森野はもんどり打って床に落ち、後頭部と背中をしたたか打つ。
森野は意識を失い、そのまま伸びてしまった。彼女がにじり寄り、何度も呼ぶが返事がない。
大男は床のふたりの足を持ってリビングの中央に引きずり出す。ふたり

の身体を起こし、背と背を合わせて手早く縛り上げる。
森野はまだ意識が戻らないのか、頭が垂れたままだ。彼女は森野を背負うような形で背を合わせ、足をまえに投げ出し、目をまるくして大男の動きを見ている。大男はリビングから出ていったかと思うと、ポリ容器を持ってきた。そしてフタをとり、容器を傾げる。透明の液体が床に流れた。その瞬間、石油臭が一面に漂った。
「灯油じゃないの。なにするのよ……。助けて……」
彼女は身を捩って、絶叫する。その拍子に、森野の身体と頭が横に傾く。森野を支えきれず、彼女は引きずられるように床に横倒しになった。
顔が灯油に濡れた床に叩き付けられた。床の灯油が顔にべとつき、臭いが鼻をつく。激しく咽せる。彼女は顔を背け、床から必死に顔を上げる。
「うるさい……」
男はガムテープで彼女の口を塞ぐ。だが灯油で濡れたほうの頬には貼り付かず、彼女は息を強く吹くと剥がれて、息が漏れる。
「一体、誰なのよ。なんの恨みがあるの」
「俺のことを忘れたのか。お前に事業を台無しにされた安井金平だ。お前には死んでもらう。一人で死ぬのも心細いだろうから、その男を道連れにな。それに二階にももう一人いるが、そいつも一緒だ。五分後に発火するように設定しておくからな。ゆっくり、最後の時を楽しむがいい。じゃ、アバヨ」
大男はポリ容器を持ち上げ、木実子と森野の衣服のうえにさらに灯油を注ぐ。それから発火装置を仕掛け、スイッチを入れた。発火装置のタイマーがカチカチと時を刻みだす。大男はゆっくりリビングを出ていった。
彼女は灯油塗れになった身体を起こし、大男の後ろ姿を追おうとした。だが森野の身体が重しのようになった身動きできなかった。
去り行く大男の大きな背に、一瞬、産廃処理場の焼却炉を襲撃したときの情景が鮮明に甦った。

6

「なんで写真を渡したんだ」
耀が執務室に戻った山城に、早速、問い詰める。
「……」
山城は机に座ったまま、耀の問いにも応えず、じっと一点を見つめ、口を開こうとしない。
彼は代表が急に態度を変えることが気になって仕方がなかった。彼がかけた「鎌」に対して代表が無関心を装っていたのはなぜか。それは嵐の前の静けさなのか、それともすべてが終わったということなのか。
あえて危険を冒し、あの女を拉致し、密かに監禁していたことが全く徒労に過ぎず、すべてが無駄だったのかと思った。そして最後に捨て台詞のように、鎌をかけてしまった自分が腹立たしく感じた。
自分に対する嫌悪感が彼自身を打ちのめし、立ち上がることすらできなかった。彼はなにもする気が起こらず、じっと机に座りつづけていた。
「おい、いつまで座っているつもりだ。まごまごしていたら、代表にやられるぞ。やつはお前を殺すつもりだ」
耀は気が気でない。苛々して叫んでしまう。
「うるさい。お前は黙っている。どうするか、今考えているんだ」

「お前は自分から『賽』を投げたんだぞ。いまさらじたばたしてもはじまらない」
「……」
「お前がやるか、それともお前がやられるかだ。どうしてあの写真を渡したんだ。あんな『鎌』を掛け、代表を追いつめて口を割らそうとしたのかね。そんなことで代表が口を割ると思ったとしたら、お前さんも甘い。情報を欲しがっている相手は代表じゃなくて、議長じゃないのかね。そんな気がするけど……」
　耀はいろいろけしかける。
「……」
　彼は黙ったままだ。
「ところで、お前さんはなぜ『黒』に入ったんだ。その理由はなんだ」
「お前には関係ない。理由はない。たまたまそうなったまでだ」
　彼は五月蝿げに投げやりに言う。
「理由がない。それじあ、もう、なにもやることがないということか」
「……」
「理由がないということはここにいてもしょうがないということか。だったら、もう代表に殺されてもいいということか」
「なんだと……」
「もういいよ。お前さんには愛想が尽きた。もうどうでもいいや」
　耀は感情を抑えているのか、いつもと違い、低い声だ。
　彼はしばらくじっと黙っていた。それから椅子から立ち上がると、窓辺に寄り、窓ガラス越しに空を見上げた。白い雲がゆっくり流れていく。
「俺は小さいときから、雲になりたいと思っていた。それなのに……」
　彼は自分に言い聞かせるように、呟く。
「なんだと……。いま、なんと言った……」
　耀は勢いを取り戻したように、大声を出す。
「俺は施設で育った。孤児院だ。母親も父親も知らない。母は生まれたばかりの俺を孤児院の玄関テラスに置いて姿を消したらしい。俺は物心つくようになると、迎えに来る母を心待ちしながら、窓辺に座って空を眺めるようになっていた。だがいつまで待っても母から連絡はなかった……」
　彼は空を見上げ、流れ行く雲を追っていた幼い頃を思い浮かべる。あれは何歳頃だったろうか。施設の子というだけで、白い目で見られた。石を投げつけてくる子もいた。逃げてもどこまでも追いかけてくる。息を切らして逃げ帰ってくれば、彼は決まって窓辺で空を見上げた。流れる雲を見るだけで妙に心が落ち着くのだった。
　学校へ入ってもいじめはつづいた。小学校から中学校と進むにつれて、ますますエスカレートしていった。入学早々に、施設の子だというメモが回された。それ以来、誰もそばに寄ってこない。「くさい」「死ね」と言われた。誰も持ち物にも触ろうとしない。隣の机は離され、机から教科書や筆箱が故意に床に落とされ、足で蹴れた。持ち物が隠されたり、壊されたりした。球技で無視されてパスされなかったり、逆に、標的にされることがあった。給食で残り物を食べきれないほど山盛りされた。
　こんなことが何度も繰り返された。同級生や先輩であれば、何度いじめられても、そのうち仕返ししてやろうと思い、自分を励ますことができた。だが担任の教師やはかの先生たちからのいじめや無視はやり切れなかった。自分がまるで生きる価値がない存在だと言われているようだった。
　定時制の高校に通うようになって、学校でのいじめは一段落したように

少なくなったものの、質が悪くなり、陰惨になった。本人のみでなく、本人と話したり、付き合っているひとに対する中傷や嫌がらせが陰に陽に執拗につづけられた。

それでもアルバイト先の先輩や大人たちよりましだった。彼らは容赦がなかった。パワーハラスメントだったらまだ耐えることもできるが、彼らはまるで物を扱うように彼を扱った。

孤児であったり、施設の子であるというだけで、なぜこうも差別され、厄介者扱いされ、いじめられなければならないのか。他の子とどこが違うというのか。

人間は社会的動物だという。だが彼には社会がまるで猛獣と一緒に入れられている檻のようだった。彼が社会で人間として生きるには、猛獣を殺すか、檻を壊すかほかなかったのだ。

「お前には分かるまいが、それでも俺は待ちつづけた……」

彼は呟く。母が現れて彼を救い出してくれる日を待ち焦がれていたのだ。

彼は高校を卒業すると、自衛隊に入隊した。当時は人気がなく、一応、身元がしっかりしていれば簡単に入隊できた。施設の院長夫婦に親代わりになってもらった。

その大分まえに、母が俺を施設に預けて間もなく病死したことを風の便りに知った。それでもそれをなかなか信じることができなかった。高校をまがりなりにも卒業できて、人並みに就職する段階になって、ようやく踏ん切りがついたということだ。

期待した自衛隊での生活も、いままでと似たり寄ったりだった。いくら努力しても上に上ることができないことを知らされ、銃などの操作や重機の扱いを覚えると除隊してしまった。

「それからしばらく建設現場で働いていたが、ある時、ひとりの男がやってきて、スカウトされた……」

彼はまるで夢見心地のように目を細める。

それはまるで夢のような出来事だった。このとき、はじめて彼はひとりの人間として扱われたように思えたのだ。このときのことを思い出すと、未だに、夢を見ているような心地になるのだった。

「そうだったのか。だが問題は……」

耀はさらに追及をつづける。

「なんだ。まだあるのか」

彼は不機嫌な声を返す。

「ケン、それでどうなんだ。『黒の集団』がいま、どんなことを目論んでいるのか分かっているんだろう……」

「……」

彼は勧誘に乗って、なにも知らずに「黒の集団」の一員になった。この組織は秘密の集団だった。組織の全容は一般には伏せたままだ。組織員にさえにも伏せられているのだ。彼はそれを知ろうとした。知らず知らずに、それも代表に挑みかかる形で解き明かそうとしたのだった。

浮遊感が消えた。突然、夢から覚め、全身に戦慄が走った。彼は調子に乗って、虎の尾を踏んでしまったのだ。そのことにようやく気付いた。

彼は次第に追い詰められていく自分を感じた。彼の周囲に張り巡らされた網が徐々にしぼめられていくのだ。

執務机に戻ると、彼はじっと身構え、次の手を探った。

7

「安井金平……、あっ……、あのときの大男か……」

木実子は大声を出した。その勢いで口に貼られたガムテープの一端が剥がれ、ばたばたと振れる。

同時に、彼女の脳裏に、ひとりで病院を訪れたときの光景がまざまざと浮かんだ。ベッドのうえで包帯の僅かな隙間から片目でじろじろと見ていた大男が鮮明に甦る。

彼女が仕掛けた焼却炉爆破で目を負傷し、頭部をぐるぐると包帯巻きにされていたのは、あの大男だったのか。だが大男がなぜ、突然ここに現れたのか。

床を伝って、耳元にキッチンタイマーのカチカチと時の刻む音が響く。

「発火装置……。五分後に、本当に、火を噴くかしら……」

彼女は他人事のように呟く。

灯油の咽せるような臭いのなかで、彼女の脳神経は次第に冒されていく。気力が失われ、意識が朦朧としはじめる。

刻々と時が過ぎる。

彼女は自分を奮い立たせようともがくが、背と背が張り合わせられたようになっている森野の身体が重しとなって動きが取れない。彼女は一端両足を曲げると、思いきり伸ばした。その反動で、彼女の背が森野の背を強く打った。彼女は力がつづくかぎり、同じ動作を何度も繰り返す。

だが何度やっても、森野は目を覚まさない。意識を失っているのか。それでも彼女は繰り返した。

ふたりの身体が少しずつ動いた。灯油で濡れて床が滑りやすくなっているらしい。

朦朧としはじめている意識と闘いながら、彼女は足を曲げては伸ばす。

カチカチと時の刻む音が次第に大きくなってきた。

「もうすぐだ……」

彼女は足を曲げる。時々、意識が落ちる。意識が戻ると、彼女は足を伸ばす。彼女はすでになにも見えなかった。それでも足を曲げ、そして勢いよく伸ばしつづける。

足先に物が当たったような気がした。だが力が尽き、彼女はそれを確かめることができなかった。

8

山城は代表の怒りを抑えた顔を思い浮かべ、もしかしたらこれが最後かと思った。代表に楯突いた報いはかならずあるのだ。

「おい、お前の質問はなんだったかな……」

彼は無理やり同居してきたヨウを思い浮かべる。俺が殺されれば、この男も一緒に死んでしまうのか。

「なにを今さら、のんきなことを言っているんだ。早く、準備しなくちゃならんだろ」

「なんのために、なにを準備しろというんだ……」

「最後まで諦めちゃいかんのだ。代表と闘うんだ」

「お前は代表と闘って勝つとでも思ってんのか。バカな。やつの後ろには何十何百、もしかしたら、何千何万もの精鋭が待ち構えているだぞ。たと

え、代表をヤッツケルことができても、本部がある。最高権力者の議長が待ち構えているんだ」

「その組織がなにをやっているのか分からない怪しいものであると、お前は薄々感じているのではないか」

「やつらにはかなわないのだ。どうしても、かなわないのだ」

「だからといって、なにもしなくてもいいのか。お前はなんとために『黒の集団』の一員になったのだ。単に、上の命令を忠実の守るために一員になったのか。お前は長い間人間として扱われてこなかったことが悔しかったと言っていたな。あれはウソだったのか。お前は誰をも差別することなく自分に忠実でなければ、生きている資格はないと思っていたんじゃないのか。そしてそのために全力を出して、そうありたいと今日まで努力してきたのではないのか。それも嘘で、でたらめだったというのか。それなら、いますぐ死んでしまえ。もう、愛想が尽きた」

「なんとでも言え。お前から言われなくとも、なんとなく『黒の集団』に違和感を感じるところがある。はじめはなんとなく世の仕組みを変えようとしているところがあるので、期待していたが……。なにしろ、仕事が細切れで、全体像が全然分からなかった。いまでもよく分からないところがあるが、それでもまえよりいくらか分かりだした。そうなると変なところが目に付きだした。お前の母親を拉致したのも、もっと『黒の集団』の全体を知りたいという欲求がそうさせたとも言える。こんなこともあって、お前から『黒』にどうして入ったのかと聞かれても、率直に答えることができなかったのだ。いま俺は、『黒の集団』をもっと知りたいと思う気持ちと、ここから逃げ出したい気持ちが半々というところだ。ここには……」

彼は自分を抑えることができなかった。

「おい、気をつけろ。足音がする。三人、いや、四人か。武器を持っている。抵抗したら、殺すつもりだ。逃げるか、それとも……。もう、間に合わない。二人が入ってくるぞ。二人がドアの外で見張っている」

耀の声が消えた途端、ドアが押し開けられた。二人の若い男が小型の電子銃を構えて飛び込んできた。

チーフの執務室といっても、広いフロアーの一角を間仕切りしたブースにすぎない。男たちはすぐドアを閉める。誰にも気付かれずに、作業を了えたいらしい。

「山城だな。両手を上げろ。逮捕する」

こもる声だ。

「誰の命令だ。お前たちは、一体、どこの所属だ」

二人の男とも見たことのない表情のない顔だった。黒の集団の全容は一切秘密で、一中隊を統括するチーフの彼にも分からないところがあった。

代表のいる本部といっても、独立の大きな建物があるわけではない。都心のビジネス街にある同業者が占有する高層ビルに同居していた。それは高層ビルのフロアーを間借りしている小さな会社か事務所風といった感じだった。

代表の執務室は上のフロアーにあり、その下のフロアーの一角に、山城たちチーフ用の執務室があった。チーフ用の執務室のスペースを除いたフロアーには、小さく間仕切りした机ひとつの占有面積の狭いブース風の空間がいくつも並んでいた。会議や打ち合わせのあるときに、出席者や来訪者たちが利用することがあったが、いつもは空で、人影が殆どない。

だが代表がいったん声を掛けると、どこからともなく、表情のない男たちが集まってくるのだ。黒の集団の構成員がビルのどこかに分散している

らしい。各同業者が黒の集団要員を確保しているという噂があったが、彼も実体を知らなかった。
だが能面のような男たちの顔付きを見た途端、即座に彼は代表が呼び寄せた構成員であることを悟った。そして彼は無抵抗で彼らの指示に従うことにしたのだ。
彼らはロボットのように代表の指示通りに行動するだけだから、下手に抵抗すれば、彼らに殺害の口実を与えてしまう。彼は両手を頭上に上げる。
彼は代表とのやり取りはあれで終わったとは思っていなかった。いや思いたくなかったのだ。あえて「鎌」をかけてまで、代表に闘いを挑んだ以上、雌雄を決するまで闘うほかないのだ。たとえ、あの目論みが失敗だったかもしれないが、代表が刺客を送り込んできたとすれば、まだ闘う余地が残されているということではないか。
一瞬、むらむらと闘争心が湧くのを感じた。次の瞬間、近付いてきた男の銃を持った利き腕を掴み、瞬時に逆手に取った。電子銃が床に落ちた。彼は素早く足で電子銃を確保し、男を盾にしてもう一人の男に向って突進した。そして電子銃を構えている男に目掛けて男を投げつけ、突き飛ばす。電子銃が宙を舞い、男が壁に叩き付けられた。
不意をつかれ、男は壁に後頭部を打ち、仰向けに倒れた。そのうえに、もう一人の男が重なるように倒れる。
彼は床の電子銃を拾い、仰向けに倒れた男に重なる男のうえに馬乗りなり、ガムテープで二人の口を塞ぎ、両手両足を縛り上げる。そして二人を机の下に押し込み、壁に寄せて蓋をする。
彼はドアの陰に隠れ、外の男が痺れを切らしてドアを開けるのを待つ。
ドアノブがゆっくり回る。ドアが静かに開いた。一人の男がドアから首を出した。彼は即座に引きずり込み、脳天を一撃する。男は頭から床に落ちた。と同時に、もう一人の男が飛び込んできた。彼はつづく男を手繰り寄せ、これにも一撃を見舞う。
床に伸びている二人の口をガムテープで塞ぎ、両手両足を何重にも巻いてガムテープで押さえ、全身をミイラのようにぐるぐる巻きにする。そしてロッカーに押し込む。
彼は男たちの電子銃を拾い、そのなかから二挺を選び、足と腰に装備してある銃入れに収める。残りをアタッシュケースのなかに仕舞う。
彼は何事もなかったように、徐に、ドアを開け、執務室を出る。
「ケン、逃げる気か。お前は逃げ切れると思っているのか。なぜ、闘おうとしないのだ」
「……」
彼は廊下に出たところで、耀の声に立ち止まる。このまま、外出する風を装い、いつものような足取りでエレベーターに向い、ビルのエントランスから街へ出て姿をくらますか。それとももう一度執務室に戻るか。
「早くしろ。お前さんは見張られている」
「ヨウ、お前は代表と戦わせたいのか。なんでだ。『黒』の同士打ちをさせ、漁夫の利をかっさろうというのか」
「なにを言うか。そうなればしめたものだけど、そんなことより、いま、代表はお前さんを消そうとしているのだぞ」
「多分な……」
一瞬、頭のなかで閃くものがあった。彼はしぶしぶ踵を返す。耀の声を聞いて気が変わったのじゃない。忌忌しいが、耀に行動を変えさせられたのだ。

たしかに、「黒の集団」の要員がどこで見張っているか分からない。すでに要所要所に見張りが立っているにちがいない。それに「黒」の秘密を握っている彼を放置しておくはずがなかった。

執務室に戻ると、彼は壁に押し付けた机を引き出し、机の下に押し込んだ二人の男を引きずり出す。身体をくねらせ抵抗する男たちを一人ずつ、後ろ手に縛り上げられている両手の腕の間を広げて椅子の背にとおしてから椅子に座らせ、身体をロープで椅子にきつく縛る。さらに、そのロープを伸ばし、両足を片方ずつそれぞれの椅子の脚に固定する。口にはガムテープを貼ったままだ。

彼は椅子に座り、執務机越しにしばらく男たちの顔をじっと見ていた。

男たちは相変わらず能面のような表情のない顔付きだった。この男たちはまるで催眠術をかけられた者のように、代表の命令を忠実に励行するロボット化した形だけの人間にちがいない。

「どうする……」

彼の脳がもうスピードで回転する。

まず、男たちを催眠状態から解放するのだ。そして代表の命令を聞きだし、新たな命令を与えよう。

彼はキャビネットの引き出しの奥に隠してある小型のアタッシュケースを取り出し、机の上で開く。原色の色とりどりのスプレー缶がびっしり並んでいる。缶には特別に開発した鼻腔から脳や神経に直接作用するさまざまな薬剤が封入されていた。

いくつもの缶が並んでいるなかから、彼は白い色の缶を手に取った。神経弛緩剤が充填されているスプレー缶だ。これで男の神経の緊張を解き、催眠状態から解放して覚醒させようというのだ。

催眠が深ければ深いほど暗示に反応しやすい状態（ラポール）になる。このような状態が強くなると、催眠をかけた人にしか反応しなくなるという。こうなってしまうと、催眠をかけられた人の催眠状態を完全に解除するには催眠をかけた人の手を借りなければ難しくなってしまう。そこでこれに代わる手段として、彼は催眠状態を解除するための特殊な神経弛緩剤を用意していたのだ。

彼は男のそばに近付き、手で鼻を摘み、呼吸を停める。苦しがってもがきだしたところで手を放し、深く空気を吸い込もうとする鼻穴へスプレーして、薬剤を吸い込ませた。

催眠状態から覚醒したのか、しばらくすると、男は目をきょろきょろ動かし出した。

「名前は何というのだ」

一瞬、目が動いた。ガムテープを貼られた口の回りの筋肉は動かない。男は口を開こうとしないのだ。

「喋らないなら、喋らせるまでだ」

彼は茶色の缶を取り出す。手で男の鼻を摘み、同じことを繰り返す。スプレーしたのはキャンプの宿泊施設で木実子と森野に何度も試した自白強要剤だった。

彼を睨んでいた男の白い目に変化が生じた。

「さあ、なんでも話すのだ。話せば、楽になる。わたしの質問に応えれば、褒美が貰えるぞ。いいね……」

「……」

じっと、男の顔を見る。口を固く閉めている。だが目付きは緩んできた。彼はポケットのなかに隠しているＩＣレコーダーにスイッチを入れる。

「誰に、なんと言われたの……」
「……代表に……山城を逮捕しろ……と……」
「『山城を逮捕しろ』と命じられたんだね。それから……」
「抵抗してら、銃を使え……」
男は疲れたのか、ぐったりして目を瞑る。彼は質問を止め、険しい目で二人のやり取りを見ている隣の男に目を向ける。そして彼はスプレー缶を取りだし、まえの男と同じことを繰り返す。
男はしばらく抵抗を試みていたが、まえの男と同じことを白状する。
「で、逮捕したら、山城をどこへ連れていけと命いじられたのか」
「屋上のヘリポートへ連行しろと……」
この男も急にぐったりして、目を閉じる。
二人の男ともふたたび催眠状態に戻ったのだろうか。ふと、彼はこの二人の男に連行されているように装い、ヘリに乗り込めば、見張りの目をかいくぐりビルから脱出できるかもしれないと思った。
彼はぐったりしている男たちを見ながら、屋上への出る道順を思い浮かべ、見張りの居そうな箇所をチェックする。できるだけ、見張りのいない道を探すのだ。
一刻も余裕がなかった。時間が経てば、それだけ見張りが厳しくなるだろう。彼の連行が遅れれば遅れるほど、怪しまれるのだ。
彼は男たちに催眠剤をスプレーし、ロープを解き、「連行」の命令を発する。男たちは彼を挟んで、歩き出す。
彼は頭に黒の大きな頭巾を被り、身体を黒色の大きな一枚の綿布で覆った。片手でスプレー缶が詰まっている小型のアタッシュケースを胸に抱え、執務室のドアを開き、廊下に出る。鋭い視線を感じた。彼は顔を伏せ、彼の両手を引くまえを歩く男の陰に隠れる。彼のあとを歩く男が彼の背に銃先を突きつけ、背を押す。
屋上へはエレベーターにするか、それとも非常階段を行くか。廊下を歩きながら、彼は迷いつづける。下から上ってくるエレベーターはひとに会う可能性が高い。かといって、「黒の集団」のフロアーはビルの高層部にあるものの、屋上まで何階もある非常階段が安全とは限らない。とにかく、時間が問題だった。
彼はエレベーターへ向う。エレベーターのまえに着いたとき、上りのエレベーターがやって来たら、それに乗り込む。なかなかエレベーターが来ないようだったら、非常階段へ回るのだ。
三人は互いにできりだけ密着して、怪しまれないように装おい、エレベーターの扉にへ近付く。上りのエレベーターのボタンを押す。
一秒、二、三……、十秒過ぎた。まだ来ない。非常階段か。
移動しようとしたそのとき、エレベーターの到着ランプが点滅する。
扉が開いた。一人の男と二人の女が乗っている。
一瞬、迷う。連行しているまえの男がエレベーターボックスに足を踏み入れた。あとの二人もつづく。
扉が閉じた。背後に鋭い視線を感じた。身体を壁に寄せ、じっと我慢する。
エレベーターが動く。そして停止した。扉が開くと、先客の三人が降りて、彼らだけとなった。彼は大きく息を吐く。
扉が閉じ、エレベーターは動き出した。屋上階へ向うだけだ。
エレベーターが止まった。屋上階か。
彼は一人の男を先頭にし、もう一人の男を後に従え、一直線に並んで、

扉が開くのをじっと待つ。
扉がゆっくり開いた。
三人の男がエレベーターのまえを塞ぐように立っている。
一瞬、エレベーターの内と外で、T字形に三人の男が対峙した。
彼は前の男の背を押し、無言で男たちの前へ出る。男たちは左右に別れ、道を開ける。その間をすり抜ける。
屋上ではヘリが待っていた。三人がゆっくりヘリに近付く。三人が乗り込むと、ヘリはすぐ舞い上がった。

第二章

9

「ミサ、そろそろ出掛けようか……」

「ええ……。しばらく帰られないかもしれないわね、ハクリ」

未佐は返事したものの、スクリーンのまえに座ったまま、椅子から立ち上がろうとしない。なぜか気力が湧かないのだ。

彼女はもう一度アムンの言葉を思い浮かべる。

「ミサ、ヨウのことだが、彼が思っていることとどうも違うようだ……」

ふたりが日本ブースを出て、オフィスを訪ねたときのことだ。

アムンは未佐の顔を見るなり、ハクリが持ち帰ったＡＩＤキッドの中身を分析した結果、耀のＤＮＡと全然一致しないことが判明したと告げた。そして木実子に会ったらその辺の事情をもう一度尋ねてはどうかと言う。

「いまさらそんなことを話しても……、どうかしら……。ふたりにとって、すでに遠い過去のことだし……」

彼女はあのとき、木実子はなぜか話したがらず、何度尋ねてもなかなか話そうとしなかったことを思い浮かべた。また同じことを繰り返すかと思うと、いたずらに過去を暴き立てるようなことを蒸し返すようで気が重かった。

「本当はＡＩＤ児でないのに、ヨウは自分がＡＩＤ児であると思い込んでいるのだよ。そうでないことが分かれば、ヨウはどうだろうか。木実子さんにしても、ＡＩＤ児と思っていたヨウがそうでないと分かれば、また別の思いもあるのではないかね。もしかして、木実子さんが親の勝手な行動でヨウをＡＩＤ児にしてしまったことにいささかでも負い目を感じているなら、このことが救いになるかも知れないし……。わたしとしては事実は事実としてはっきり告げるほうがいいと思うがね」

こう言うと、アムンは口を固く閉じ、じっとミサの目を見つめたまま、二度と口を開こうとしなかった。

彼女は「でもそれはハクリが持ち帰ったＡＩＤキッドのものと耀が関係がないというだけで、耀がＡＩＤ児でないことを証明することにはならないのではないか」と言おうとしたが、確信に満ちたアムンの目を見て、口を噤んでしまう。だがこころのなかで、もしかしたら、ハクリが持ち帰ったＡＩＤキッドそのものがヨウが投げ捨てたものではなかったかもしれないとも思う。耀に確かめることもせず、そう決めていいのか。別のものということもあるではないか。疑念が疑念を呼ぶ。

「あ、そうだったのか」

思わず、未佐の口から洩れた。アムンはすでに未佐の疑念に応えていたのだ。彼女はアムンの目を見て、大きく頷く。

アムンもそのＡＩＤキッドが耀が投げ捨てたものかどうか疑っていたのだ。それを確かめるために、アムンはまえもって、キッドの容器に付着している使用者の分泌物のＤＮＡチェックもしていたにちがいない。そしてそれと耀のＤＮＡとの関係をから木実子が使用したＡＩＤキッドの間違いないことを確かめていたのだ。

それにしても、耀がＡＩＤ児でないとなれば、父親は誰なのか。やはり、土田教授なのだろうか。

彼女は目をスクリーンへ向けていたものの、なにも見ていなかった。

「いまのところ、もとに戻して……」
突然、背後で、ハクリの声がした。
「はい……」
スクリーンに目を凝らす。木実子の実家があった団地らしい。いつの間にか、かって彼女が居候していた戸建ての家が映し出されていた。
「もっと、大きく……」
言われるまま、彼女は映像をクローズアップしていく。
静まり返った古びた一軒家が映し出された。
「勝手口のところ……」
画面は指示に従って移動する。
「ここかしら……」
「そこのドアが開いているようだが……」
「……」
勝手口のドアが僅か開いているように見える。
「じゃ、今度は、車を空中から降ろした湖畔付近を……」
画面が変わる。
「車が駐車していたところはこの辺かな……」
どこにも車の影はなかった。
「やはり、あの一軒家が怪しい。発信チップの摘出手術を受けて、そこで休んでいるのだろう。ミサ、出掛けるよ」
いつもは優しいハクリの厳しい声に、彼女は有無を言わせない響きを感じた。

１０

「どこへ行くんだろう……」
「多分、Ｋキャンプだろうな」
「でも方向が……」
「回り道をしているように見えるが間違いないだろう」
「そうかなあ……」
山城は前と後の席の見張りに気を配りながら、耀の問いに応えるが、彼自身、ヘリがどこへ向おうとしているのか分からない。操縦士は見たこともない顔だし、たとえ知り合いだとしても、捕らわれの身の立場では問い質すこともできないではないか。
代表は誰にも感付かれない方法でこのまま俺を消そうと思っているのかも知れない。たとえばＫキャンプのヘリポートで無人操縦の別のヘリに移し、空中で爆破するとか、あるいは墜落を装うとか……、彼の頭につぎからつぎにいろんな案が浮かぶ。
Ｋキャンプには農薬散布用のに無人ヘリが何機も常備されている。だからまずＫキャンプへ飛んでいるのだ。
耀の不安そうな声に誘われ、彼はあれこれ思い巡らしているうちに、単なるひとつの思い付きが確信へと繋がっていく。
いますぐ、このヘリを乗っ取るか。彼は計画を練る。だが行き先がＫキャンプかもしれないと思うと、つい躊躇してしまう。
Ｋキャンプは彼の本拠地だ。ここを根城に拉致した木実子らふたりを隔離していたのもＫキャンプだった。
行き先がＫキャンプでなければ、彼は早速行動を起こすつもりだった。

だが彼にはヘリがなぜかKキャンプをめざしているように思える。いや、もしかしたら、そう思いたかっただけなのかも知れない。
ただ本拠地だということだけで、そこに行けばなんとかなるという思いを抱いているのだろうか。彼は半信半疑だった。自分がどうしてよいか分からなかった。
Kキャンプが彼の本拠地であることを代表が知らぬはずはなかった。それなのに、あえて彼をKキャンプに送ろうとするのはなぜか。彼はしきりに考えるが、代表の意図が読めなかった。
「ヨウ、お前は代表がなぜ俺の送り先にKキャンプを選んだと思うか……」
「本当に、Kキャンプへ向っているのか」
「うん、そうだ。もう間違いはない」
「じゃ、いちばん近いからだろ。そこからまたべつのヘリに乗せられて遠いところへ運ばれることになるかも……」
「お前もそう思うか。代表は用心深い男だから、Kキャンプに俺を閉じこめようとはしないだろうな……」
「お前はこのまま遠くへ運ばれてしまっていいのか……」
「……」
彼は口を固く閉じたままだ。
ヘリが着陸したら、即座に操縦士を捕まえるのだ。彼は頭巾の隙間から、操縦士の様子を伺う。
時間を気にしているのか、操縦士はしきりに腕時計を覗いている。
眼下に森が見えた。ほどなくKキャンプの施設が近付く。
ヘリは高度を下げていく。施設の屋上ヘリポートの真上に来た。
「やはり、そうか……」
彼は呟く。無人ヘリが駐機していた。
操縦士は心得たように、無人ヘリに横付けになる位置にヘリを誘導していく。近付いたところで、どすんと着地する。そしてエンジンを切った。
操縦士は身体を回し、後ろを振り向いた。
その瞬間、彼は操縦士席めがけて飛び込み、操縦士のヘルメットを掴まえると、強く捩じる。首を捻られ、操縦士はそのまま伸びてしまう。
「こやつをこれでこぶ巻きにするのだ。そして隣に駐機しているヘリの胴体に括り着けるのだ」
彼は身体を覆っていた綿布を脱ぎ、能面の男たちに命じる。
男たちは操縦士をこぶ巻くにして外へ出すと、丸太を担ぐように担いで無人ヘリの下へ運ぶ。そして手際よくヘリの胴体に括り着けた。
突然、無人ヘリのエンジンが始動する。
「リモコンか……」
どこかで、誰かがリモートコントロールしているのだろうか。彼は辺りを見回す。
プロペラが高速で回転し出す。男たちは身を伏せる。
無人ヘリが宙に舞い上がった。ぐんぐん上昇していく。小さな点となった。そして視野から消えてしまう瞬間、火の玉が見えた。そして爆発音がした。
「時限爆弾だ」
男のひとりが叫ぶ。
「おい、このヘリにも爆薬が仕掛けてあるかもしれない。調べろ。どこかにモニターカメラが設置されているらしい。注意しろ」
彼には代表が本部でモニターの画面を見ながら、コントローラーを操作

している姿が浮かぶ。
男たちが恐る恐るヘリコプターに近付く。
「あれだ」
彼は素早くヘリの下に潜り、燃料タンクに付着しているペンシルケース状の細長い物体をもぎ取り、思いきり遠くへ投げる。物体は回転しながら宙を舞い、木々を越えて空高く飛び、森の中に落ちていく。程なく、爆薬が破裂する音が響いた。
やはり、リモコンによる爆破か。監視カメラはどこだ。
「カメラはないか。ヘリに装備してあるカメラもチェックしろ」
男のひとりがヘリに乗り込み、操縦席の回りを点検する。もう一人がヘリの外回りを念入りに見て回る。
もしモニターカメラが設置されていれば、彼らの作業の一部始終もキャッチされているはずだ。彼もカメラにキャッチされているにちがいない。彼は画面に映し出されている自分の姿を想像する。
一瞬、不安が襲った。まだ黒の頭巾を被っているものの、代表はすでに頭巾の男が彼であることを識別しているかもしれない。
とすれば、代表はつぎにどんな行動に出るか。これに対抗して、どうするか。どうすればいいのか、彼は迷う。
「カメラは見つかりません。ないようです」
ヘリのなかを調べていた男が報告する。外回りを調べていた男も頷く。
本当に、カメラがなければ、代表には彼がKキャンプの屋上にいることに気付いていないかも知れない。もしそうだとすれば、無人ヘリの爆発や爆薬の破裂はリモコンによるものではないということになるのか。
「爆発物など、おかしなものもはないんだな。操縦はできるな。じゃ、このヘリでお前たちは本部へ戻れ。そして代表に『任務を遂行しました』と報告せよ。それ以上のことはなにを聞かれても応えるな。いいな。念のために、最近の記憶を消しておく」
彼はアタッシュケースから記憶消却スプレーを取り出し、二人の鼻腔に噴きかけた。それから、執務室のロッカーに閉じこめてある二人を解放するように言い含めて、二人の能面男をヘリの押し込む。
ヘリコプターのプロペラが回転し出す。しばらくして、機体がふわっと宙に浮き、九〇度回転すると、前進し、瞬く間に姿を消した。
視野からヘリの姿が消えても、彼はそのまま、屋上のヘリポートに立ち尽くしていた。いくら待っても、ヘリが爆発したような爆発音はなかった。ヘリが無事帰途についたらしい。このことを確かめると、彼は徐に踵を返す。
だが一瞬、不吉な予感に襲われ、彼はふたたび立ち止まる。そしてもう一度ヘリが消えていった空を見上げた。

11

「この辺かな。地上へ降りていくよ」
ハクリは後ろのつづく未佐に声を掛ける。
「雑木林の近くの赤茶けた屋根の家よ」
一角に雑木林が残っているものの、一面にマッチ箱にような家が整然と並んでいる。ふたりは天空から急降下していく。
「へんな臭いがするわ。なにかしら……」

家のまえで道路に降り、扉が開いてある門からなかへ入る。玄関のドアは閉じているが、勝手口が開いていた。
ふたりはドアの隙間から素早くもぐり込む。
横になった赤いポリタンクから灯油が流れ出したのか、リビング一面に灯油が広がり、まるで石油の海だった。その海のなかに背中合わせに縛られた男女ふたりが横倒しになっている。
「あ、臭い。ハクリ、早く、ガラス戸を開けて」
未佐は横倒しになっているポリタンクを起こす。そばに灯油をかぶり濡れてしまった小さな箱落ちている。
「これは……」
発火装置だった。彼女は急いで電池を抜く。それから横倒しになっているふたりに近づく。
木実子と森野だった。ふたりは気を失っているらしく、起こそうとしても思うようにならない。ふたりを座らせようとしてもなかなか座らないのだ。彼女はテーブルを引き寄せ、その足を支えにしてふたりの上半身を固定する。
床にはかなりの量の灯油が海のように一面に広がっている。早く灯油の海をなんとかしなければならない。
「ハクリ、カーテンを外して」
彼女はカーテンを広げ、灯油の海を覆う。灯油がカーテンに吸い込まれていった。
テラスに面したガラス戸が解放されて、室内の石油臭が次第に薄らいでいく。ハクリは灯油をたっぷり吸ったカーテンをテラスへ引き出す。そして新しいカーテンを床に広げ、さらに灯油を吸わせる。
「もっと、カーテンがないかしら」
窓のカーテンも外された。彼女は二階の部屋にもカーテンがあったことを思い出し、階段を駆け上がる。彼女は自分が居候したときに使っていた部屋に飛び込む。
カーテンを外そうとしたとき、隣部屋からうめき声のような音がした。彼女は隣部屋を覗く。猿轡を嵌められ、手足を縛られた女が横たわっていた。
「あ、おばさんじゃない……」
木実子の母貴世だった。
彼女は貴世の猿轡を外し、手足のロープを解いていく。
貴世は不思議そうな顔付きで、急に自由になった手足を動かしている。貴世には未佐の姿が見えないのだ。声も聞こえない。
貴世が起き上がって、早くリビングへ降りていって欲しかった。彼女はなんとかこのことを伝えようと、押入れを開け、シーツを引っ張り出して、階段をゆっくり下りていく。だが押入れからシーツがひとりで飛び出して階段を下りていくのを見て、貴世は腰を抜かしてしまう。
未だにリビングには石油臭が充満しているものの、床の灯油はあらかた拭き取られ、一部で床が乾きはじめている。ふたりのロープを解き、彼女は持ってきたシーツを広げて、その上に横たえる。
ふたりとも微かに息をしているが、意識は朦朧としているらしい。
階段のほうで音がした。急いで近付くと、足を踏み外したのか、貴世が階段の下でのけ反っている。
「石油臭い。一体……、あの大男だ……」
貴世は腰を摩りながら、立ち上がる。

「まあ……」
リビングに一歩足を踏み入れ、驚きの声を発する。そして走るようにして床の木実子に近付く。
「木実子、木実子……、どうしたの……」
貴世は木実子を揺すり、頬を叩く。
「救急車を早く呼んで」
未佐は思わず、叫ぶ。そして瞬間的に一体同化して貴世の身体にもぐり込む。そして「救急車、救急車」と繰り返した。
貴世の手が伸び、テーブルに置いてある電話機の受話器を掴んだ。

12

「おい、どうする？　ロッカーの二人……」
本部へ向って飛んでいるヘリの操縦席で、能面男がもう一人を振り返る。
「解放した途端、われわれの行動を代表に垂れ込まれても困るな。しばらくほっといたほうが無難かもしれない」
「そうだな。われわれがヘリでKキャンプへ行ってきたことも、あくまで内緒にしていたほうがいいのではないか。ヘリの操縦士が一人で山城をKキャンプに運び、そこで無人ヘリに括り付けて処理したことにしておこう。このヘリも爆破されることになっていたらしいからな。われわれの仕事は山城を捕らえて屋上に待機しているヘリに運び込むとこまでということだ。あとのことにはなにも知らないし、一切、関知していないことにしよう。いいな」
「OK。分かった。で、このヘリはどうするんだ。このまま、本部ビルのヘリポートに降りるわけにはいくまい。ヘリが戻ったことが知られれば、厄介だぞ」
「じゃ、どこかで乗り捨てるか」
「そうだな。不時着したようにできればいいか」
「OK。その線でいこう。だがあんまり遠くないところがいいな。歩いて帰ることになるからな……」
「かといって、街の近くじゃ、すぐ見つかってしまうぞ」
「ふむ……」
「おい、燃料が……」
一人の男が計器を指差す。
「え？　これじゃ、どこへも行けない。Kキャンプへ引き返すか」
「早く、向きを変えろ」
ヘリが大きく旋回する。遠くに雑木林が広がっていた。そのなかにKキャンプが隠れているのだ。
「あそこまで引っ返せるか。燃料が切れるまえに、着陸したほうがいい。高度を下げろ。早くしろ」
エンジンの回転音にときどき不規則な爆発音が混じる。プロペラの回転に乱れが生じたヘリは急速に降下していく。
「おい、おい、どうした……」
男は操縦桿を力一杯引く。だがヘリは操縦不能に陥ったのか、操縦士を無視するように地面へ向って落下していった。

13

山城は空を見上げ、じっと目を凝らす。やはり時折きらりと光る。彼は光に焦点を合わせる。

「あれは……」

ヘリを見送り、彼が屋内へ入ろうと踵を変え、一歩踏み出した。何気なくもう一度振り返ったとき、微かに光るものが目に入ったのだ。

一瞬、錯覚だろうと思った。だが彼を襲った不吉な予感がふたたび戻った。彼の目がヘリが姿を消していった方向の空にくぎ付けになる。

彼にはなぜか、その光がヘリポートから飛び立ったヘリのもののように思えた仕方がなかった。あのヘリも爆破されたのか。

無人ヘリの爆発が目に浮かぶ。能面の二人が乗ったヘリと二重写しになって現れた。

「まだどこかに爆薬が隠されていたのだろうか」

彼はヘリの胴体に付着していた爆薬を思い浮かべる。だがチェックしたとき、その他に爆薬を見付けることができなかった。そして彼なりにヘリの安全を確かめて二人を本部へ帰したのだった。

もしあのヘリが爆破されたとしたら、彼の身代わりで三人が命を失ったことになる。彼はやり切れない思いで、大きく息を吐く。ほんの出来心からはじめたことが三人の命を奪うことになったのだ。

そもそもあの女に興味を持ったことが間違いだった。代表の関心事に首を突っ込んだのが間違いの元だった。部下は部下らしく、上司の関心事には一切無関心でいなければならにのだ。

こう思ってみたものの、彼にはそうすることはできなかった。悔いはするものの、かといって、自分の行動まで否定するつもりはなかった。

それにしても、なぜあの女にそれほどまで執着してしまったのか。湖畔で一軒家を見張っているときの行動として、代表の関心事に興味を持つことはありうることだろう。だが任務を了えたあとまで興味を持ち越し、さらに、女を拉致してKキャンプに監禁してしまったことは、確かに度が過ぎている。

かといって、なぜそうしてしまったのか、自分でも分からなかった。そこまで女のことに執着している自分に全然気付かなかったのだ。

彼とあの女との間に、無意識レベルでなにかしら離れがたい関係が存在しているのだろうか。なぜか、彼は女に対して全然違和感を感じることはなかった。もしかしたら、彼は拉致して監禁している女に母性を感じていたのかも知れない。

彼は自分の気持ちがよく分からなかった。なぜか分からないが、あの女に対しては妙に親近感があった。そして終いには、女たちに施設のなかで自由に振る舞わせてしまっていた。

だから、それが代表の逆鱗に触れるとは気付かずに、とっさの判断で、いとも簡単に、代表に女の写真を代表に見せてしまったのだった。それはいつもの彼には考えられない全く不用意な行動だった。

なぜか。こころのどこかに女の写真を見せびらかしたい気持ちが潜んでいたのだろうか。なぜそんなに見せびらかしたいと思うのだろうか。自分の母親でもなければ、恋人でもないのに、なぜそんな気持になったのか。

いまさらそんな言い訳がましいことを考えて見ても仕方がない。代表は徹底して消しにかかっているのだ。

代表はヘリを乗っ取って逃げることも計算していたうえに、一度は無人

ヘリで殺し、本部からＫキャンプへ飛んだヘリでもう一度彼を殺そうとしていたのだ。
彼は全身を戦慄が走るのを覚えた。
一回、そしてもう一回、彼は死んでしまったのだ。一回目は無人ヘリで、二回目は乗っ取ったヘリだ。彼は代表に完全に抹殺されてしまったのだ。
あの女に関心を持っただけで、なぜ、こうも危険視されるのか、彼には分からなかった。なにも覚えがなかった。彼は恐怖に戦くより、ただ、唖然とするほかなかった。
それにしても、いつもの彼と違い、なぜあの女がいつまでも気になるのか、彼自身不思議でならなかった。

１４

「おい、なにをぼんやりしているんだ。代表はＫキャンプにやってくるぞ。自分でお前が死んだことを確かめるためにな」
耀は山城が代表と闘う気になったと思い、自分までがわくわくしていた。それなのに、なぜか急に山城の動きが緩慢になった。彼には戦意喪失どころか、すっかり気落ちしているように見えて、気が気でなかった。
「……」
山城は彼には応えず、徐に身体を動かし、煙突のそばにある施設内へ通じる秘密のエレベーターへ向う。
「おい、どうしたんだ、これから代表と闘わなければならないのに……」
「うん……」
「誰も助けてはくれないんだぞ。お前一人で闘うほかないんだ。お前のかつての部下もいまは敵だ。いいか」
「うん……」
気のない返事がつづく。
「聞いてんのか」
「聞いている、お前のガンガン声をな。どうしてそんなに俺を仲間と闘わせたいんだ。お前の魂胆はなんだ……」
「バカ言うな。お前のことを心配しているんだぞ」
「余計なお世話だ。代表と闘っても、俺には勝ち目がないし、同士打ちをしてもはじまらない。俺はさっさと逃げることにする。安全に逃げる方法を考えているところだ。頼むから、静かにしてくれないか」
「なんだと、お前は逃げ切れると思っているのか。どんなに考えても、ムリだ。お前は代表の、そして『黒』の秘密を握っている以上、やつらはお前を生かしておかないだろう。かっての同士はいまやすべてがお前さんの敵になっている。生きるか死ぬかの闘いしか残されていないのだぞ」
逃がしてなるもんか。ここで逃げ出されては、これまでの労が水泡に帰してしまう。彼はどうしても山城に逃げ出すことを思いとどまらせなければならないのだ。
「……」
「それにお前には『黒』とそしてその代表と闘う大義名分がある。お前は『黒』がこの世界でなにを企んでいるか薄々知っているだろう。それを許しておいていいのか。お前は小さいときから、そういうことに反発して生きてきたんじゃなかったのか」
「俺は『黒』がなにを企んでいるか知らないよ。なにも知らないんだ。た

だ命じられるままに行動してきたまでだ」
「なにを卑怯なことを言うか。お前はこの施設の地下になにが隠されているか知っているだろう。このことひとつでも、お前は『黒』の秘密を知っていることになるんだ。代表はこんなやつを野に放つようなことは決してしない。もしこのようなことが議長に知れたら、即刻死刑だ。即座に、首がちょん切られてしまうだろう。代表はそのことを恐れているのだ。このことを逆手にとって闘うのだ。お前ひとりでも十分闘うことができる」
「……」
「まだ分からないのか。お前はもう逃げられないんだ。お前には闘う道しか残されていないのだ」
「代表を叩き、議長と闘う？　とんでもない、勝わけないないだろ。勝ち目のない闘いするバカがいるか」
「バカ、やってみなきぇあ分からないではないか」
「なに……」
「お前がそんなにだらしがないとは思わなかった。お前なんか代表に殺されようが、もうどうなってもかまうもんか。お前が知らないかもしらないが、お前たち『黒』がこの国でなにを目論んでいるのか話してやろう。それを聞いても、代表と闘おうとしないなら、お前の心臓を止めてしまう。いいか」
　彼はアムンが話していたことを思い浮かべながら、かいつまんで、環境ホルモン（内分泌撹乱化学物質）様ある種の合成化学物質を用いた社会実験を行なっていることやこの国を世界戦略の基地にするために乗っ取ろうとしていることを話す。
「なんだと、なんのための社会実験なんだ。それに国を乗っ取るなんてできっこない。なにをぬかすか。全くの妄想だ。そんなこと妄想以外にありえないことだ」
「お前、本当に、そう思っているのか」
「『黒』にはそんな力も野心もない」
「お前も大分洗脳されているようだな。お前が国の行政機関の委員会委員など特定省庁と関係の深いある大學教授と昵懇の間柄で（接待、資金提供等）、国の施策や政策に『黒』の意向を反映させようと盛んに働き掛けていたことがあったな」
「う、う……」
「それも社会実験を成功に導くためにな」
「……」
「社会実験はなんのためだと思うか。それは『黒』のための『黒』による世界人口のコントロールのためなのだ。世界人口の爆発的な増加は、いずれ、世界を破滅へ導くと考えているんだな、『黒』は。そしてそれは『黒』の存続基盤をも危うくするものだ。そこで『黒』は自身の存続を考え、効果的な世界人口コントロール手段を開発しようと考えているということだ」
「……」
「そのために、お前さんも……」
「なんだって……」
「熱心に行政に働き掛けて、合成化学物質の環境ホルモン（内分泌撹乱化学物質）チェックを手加減するように策動していたんじゃないの」
「それが世界の人口コントロールとどう関係するんだ。あれは全然別の話だ。単なる製品売り込みだ。営業次元の話にすぎない」
「お前さんは本当にそう思っていたのか。官僚を籠絡して、多少のことに

は目をつむってもらい、問題の合成化学物質の販路を広げようとしただけだというのか。そういったことで、『黒』は世間の目から逃れて密かに行政権力を掌中にしようと考えていたのではないかね。これが『黒』のようなグローバル企業の世界戦略の第一歩なのだ。」

「お前はなんでそんなことを知っているんだ。大体、そんなことはお前の空想か、捏造にすぎない……」

「お前さんには見えないかもしれないが、『黒』がいまやっていることは、まさに、日本の国家権力に対する乗っ取り行為そのものなんだぞ。いや、日本の乗っ取り作戦だ」

「オーバーな。大体、なんのために日本を乗っ取る必要があるのだ」

「世界人口の九九・九九パーセントを支配下に置き、自分たちだけが美味しい果実を掌中にするためだ。この目的を実現するために、『黒』は強固なシステムを世界に構築する計画だ。その第一段階として、その拠点のひとつを日本につくろうとしているのだ」

地球の資源に限りがあるにもかかわらず、世界人口は爆発的に増加し、いまや、地球の資源枯渇が現実問題となりはじめている。そこで地球の資源枯渇を先取りして、「黒の集団」はこれに備えようとしているのだ。

「もしそうだとすれば、地球の資源枯渇を先取りする『黒』の未来志向の行動こそ、われわれ人類のすべてが取るべき行動ではないのか」

「そういうことになる。だが『黒』は資源枯渇を回避するかわりに、世界人口の九九・九九パーセントを支配下に置こうとしているのだぞ。過剰人口をコントロールする一方で、世界の九九・九九パーセント人びとから搾取を繰り返し、世界の富を独り占めしようとしている。これでいいのか」

資源枯渇が現実問題となりつつあるにもかかわらず、経済のグローバル化によって、国規模や地域規模から地球規模へと一段と広域で経済成長が推し進められている。大企業を中心に、企業活動も国境を超えて巨大化高度化大量化し、マーケットの地球規模への広がりとともに、地球規模で大量生産大量消費大量廃棄が進み、浪費の拡大傾向のもとで資源浪費も一段と進んでいる。これにともない、地球の資源枯渇も現実味を帯び始めてきているのだ。

このような状況のもとで、「黒」はさらにより一層の経済成長をはかるために、世界の人口をコントロールし、適正人口規模の維持を目論んでいたのだ。

「後発の新興国が先進諸国の後を追って経済成長をめざすのは当然なことだろう。その際、物的な豊かさを求めて先進諸国が歩んできたように大量生産大量消費大量廃棄方式の資源浪費型経済成長を推し進めようとするのも致し方ないことだ（これを推し進めるのは国際大企業のケースが多いが）。かかる場合、地球資源の絶対的枯渇を回避するには、資源を再生産するか、資源の代替物を開発するか、それとも資源の消費量を減らすかしるほかない。資源の消費量を減らすには人口をコントロールするのが一番手っ取り早い。それで時間稼ぎをして、資源に変わるものを作り出すことだ。それはわれわれ化学屋の得意な分野だ。お前が心配することはなにもないのだ」

「これまでもそう言って問題の解決策（対策や規制の実施）を先延ばしにしてきた。ことに、国際企業や巨大企業の連中が先導して反対を唱え、先送りを図ってきたのだ。たとえば、大気や水域の汚染、森林破壊や砂漠化といった自然破壊（環境破壊）など、かっては公害といわれた環境問題を例にとれば、連中は最後まで対策や規制に反対を唱え、社会の圧力でこれらに対する規制が強化されると、経済のグローバル化に便乗して国内企業

の多くも活動を国際化して、労働力が豊富で、なおかつ、環境規制の緩いまたは無規制の諸国へ生産拠点を移してまう。こんなことは『黒』の連中もあたりまえのことと考えているのだろ」

「……」

「ところが、地球資源枯渇のように、問題が地球規模のこととなるとそうはいかない。そこでつぎに『黒』が考え出したのが、地球規模の人口コントロールということだ。だが問題は、そう単純じゃない。たとえ、いくら世界人口を適正規模に抑えても、問題を先送りにするだけなのだ」

「それでもなにもやらないよりましだ」

「個々的にその都度適当なことをやっても、ごまかしに過ぎない。いま、地球ではさまざまなこと（事象）が同時的に互いに複雑に錯綜して生起しているのだ。言い換えれば、地球上で生起するすべての事象は相互にシスティマティックに結びついているということだ。だから、ある事象の対策を考えるときにはこれらの相互関係を考慮しなければならない。このことを無視すれば対策として十分機能しないか、場合には悪影響すら生じかねないのだ」

「……」

「『黒』の行動は独りよがりの自分本位の考えに基づくものにすぎない。これで世界の多くの弱いものがますます痛めつけられ、苦しまされることになる。お前さんは小さいときにいじめられた仕返しぐらいにしか考えていないかもしれないが、かっての弱者であるお前がいま、『黒』の一員として世界の弱者をいじめようとしているのだぞ。どうしてお前がそこまでしようとするのか」

「……」

「『黒』の行動は地球を台無しにしているばかりでなく、かってのお前のような世界の弱者を追い詰め、ますます弱いものにしてしまおうとしているのだ。富めるものはますます富み、貧しいものはますます貧しくなる。それでもお前は『黒』を擁護するのか。それとも、心を入れ替え、それを阻止するために代表と闘うか」

彼はこう言い放つと、山城の心臓を強く握りしめた。

15

執務机の電話が鳴った。

ベルが二度繰り返されるのを待って、代表は徐に左手を伸ばす。受話器を右手に持ち替え、耳に付ける。これが受話器をとるときの代表のやり方だった。

「代表、Kキャンプを発ったヘリも墜落炎上しました」

受話器の奥から抑揚のない声が漏れる。秘書室に特別秘書として配属してある隠れ隊員だった。

「そうか。ご苦労うさん」

代表は低い声で応え、受話器を返す。

彼は黒の革張りの椅子の背に身体を預け、目を閉じた。

突然、瞼の裏に山城の精悍な顔が浮いてきた。凄い目をして睨んでいる。彼は急いで打ち消そうとする。だが強力な接着剤で貼り付けたように、何度試みても消えることはなかった。

彼は山城の顔を強制的に消し去ろうと、目を開こうとした。だが、どう

したわけか、瞼がのり付けされたようにビクともしない。
ブザーが鳴った。
「どうしたのだ」
議長の声が響いた。彼は慌てて目を開こうとする。だが壁一面の巨大スクリーンが見えない。
「目が……、瞼が開かないのです」
彼は椅子から立ち上がり、スクリーンへ向って不動の姿勢をつくる。そして必死に訴え、親指と人差し指で瞼をこじ開けようともがく。だが目は開かない。僅かに開いても、指を放すと閉じてしまうのだ。何度やっても、閉じた瞼を開けることができなかった。とうとう両眼とも薄目にさえ開くことはなかった。
「目が開いたら、連絡するように」
議長の冷ややかな声は響く。
スクリーンから議長が消えたように感じた瞬間、大量の冷や汗が背筋を流れ落ちた。彼はぐったりして椅子に崩れ落ちる。
左胸の下部に鋭い痛みを感じた。錐で突き刺されたような痛みだった。彼は息を止め、胸を押さえて痛みに耐える。
「あ、狭心症か……」
彼は秘書を呼ぼうと、手を伸ばし、机のスイッチを探る。だが激しく襲う痛みに堪え兼ね、彼はそのまま机に伏せてしまう。
瞼の裏には山城の鋭い目が光っている。彼は山城から逃れようと必死にもがく。もがいているつもりでも、彼の身体は微動だにしない。
痛みが胸一面に広がっていく。意識が次第に落ちていった。
光のない暗闇の空間だった。底のない深淵へ真っ逆さまに落ちていく。だが落下するといっても、なぜかふわふわと浮いているような感覚で、ゆっくり落下していくのだ。
もう胸の痛みはなかった。彼は自分がなにをしているのか理解できなかった。いや、理解しようとは思わなかった。自分の置かれている状況を思い煩うこともなく、ふわふわと落下していく感覚を楽しんでいた。
突然、眩い光が射した。彼は光の射す方向へ近付いていく。
真上からスポットライトを浴びているように天板が明るく照らされた大きな机があった。執務用両袖机だ。机に一人の男が伏せている。さらに近付く。その男は彼によく似た男だった。
彼はしばらくその男を眺めていた。どこから見ても、自分とよく似ている。もしかしたら、その男は自分ではないか。でも、どうして自分が自分を見ることができるのか。
男が伏せている左側の壁一面がスクリーンとなっていて、黒い尖り帽子を被った男が大写しになっていた。男は盛んに口を動かしている。彼は一心に耳を傾けるが、なにも聞こえない。
黒い尖り帽子を被った男がスクリーンから飛び出して、机に伏せている男に近付くと、むんずと頭髪をつかみ、顔を上げ、光に向けて確かめる。そして机の天板のうえに横たえる。
彼は天板に長々と伸びている男の顔を覗く。見たことのある顔付きをしている。やはり自分なのか。だがなぜ自分がそこにいるのか理解できなかった。
もしかしたら、そこに横たわっているのは、死んでしまった自分なのか。では死体を見ているのは誰なのだ。やはり自分が自分を見ているのか。

黒い尖り帽子を被った男が天板の男の服を剥ぎ取り、胸元を露にすると、血の気のない白い手にメスを握る。そして胸の中心部にメスを入れ、垂直に一〇センチほど切り開く。そこへ一〇円玉大のボタン状物体をひとつずつ計五個埋める。

耳元でブザーがけたたましく鳴った。

彼は目を覚まし、執務机にうつ伏せになっていた自分に気付く。だが全身が気怠く、瞼は開いたものの、まだ深い霧のなかを彷徨っているようだった。彼は珍しそうに辺りを見るが、回りにあるものの輪郭も不鮮明で、すべてが薄ぼんやりしている。

ふと、スクリーンを見上げる。黒い尖り帽子を被った男の姿はなかった。彼は大きく息を吐いた。

ブザーがふたたび鳴った。手を伸ばし、スイッチに触れる。

「はい……」

「代表、ヘリコプターを見つけました。ヘリは森に不時着して大破し、炎上した模様でしたが、乗員の姿はもちろん、遺体もありませんでした。辺りの捜索は続行中です。結果が分かり次第報告します」

「分かった」

彼は短く応える。スピーカーから流れる部下からの報告さえ、鬱陶しく感じる。彼は早々にスピーカーを切ってしまう。

頭もなかには夢ともつかない得体のしれない光景が現れたり消えたりしていた。画像を再生するかのように、繰り返し何度も思い浮かべる。

一人の男が執務机の天板に横たえられ、メスで男の胸が切り裂かれていく。執務机のように見えたのは手術台だったのか。皮膚が切り裂かれて肉が露になった。切り口が開き、切目に溝が出来る。そのなかにボタン状物体が放り込まれると、切り口が縫い合わされていく。

一体、なにが埋め込まれたのか。彼はワイシャツのボタンを外し、手を差し込み、胸を触る。傷跡らしきものはない。痕跡らしいものもなく、指先にはボタン状物体らしい感触もない。

あれはやはり夢だったのか。

「瞼が開いたか」

突然、議長の声が響いた。

左手の壁を見上げると、スクリーン一杯に議長の顔が大写しになっており、意味不明な笑みを浮かべている。

「お連絡しようと思っていましたが、実は……」

「なんだね」

議長は珍しく穏やかな顔をした。

「不思議な夢を見たので、そのことが気になりまして、もう一度思い返していたところです」

「どんな夢かね」

「胸にボタンのようなものを埋め込まれた……」

彼が言いだした途端、議長の顔が厳しく引きつった。だが一秒とつづかなかった。すぐいつもの顔付きに戻った。

「夢のことはあとでゆっくり思い返せばいい。ところで、われわれが実施していた日本国内での社会実験はほぼ予定の成果をえたように思う。われわれの開発した化学合成物質Xによって、日本の成年男子の精子数がすでにかなり減少し始めているようだ。この成功で、いよいよつぎの作戦を実

施する段階に入ったということになる。『乗っ取り作戦』だ。だが、社会実験の効果が思ったよりも大きく、化学合成物質Ｘの影響で、日本では今後人口が急激に激減していくにちがいない。黙っていても、これで日本は急速に弱体化していくことだろう。となれば、無理して『乗っ取り作戦』を実施するまでもないようにも思えるのだが、日本の昨今の様子はどうかね」

「昨今の様子ですか……」

彼は訝る。議長の調子がいつもと違うのだ。

突飛に、様子はどうかと尋ねられても、応えようがなかった。確かに、このところ、日本の人口が減少傾向にあった。毎年、一〇〇万人前後の減少がつづいていた。このままでは五〇年後には五〇〇〇万人の減少が予想される。寿命が伸び、高齢者が増える傾向にあるが、出生数が年々減っているのだ。

とはいっても彼には、これが議長の言うように、化学合成物質Ｘのせいだとは言い切れないようにみえるのだ。確かに、日本における人口の減少傾向と化学合成物質Ｘの販売量は比例している。かといって、これが日本の成年男子の精子数減少のせいだと断定することができるのか疑問を感じるのだ。

「一度、日本の実態を見に出掛けようと思うがどうかな」

「それはいつでも……。でも、わざわざご足労を頂かなくても、なんなりとご指示いただければ、それに従い……」

「いや、この際、世界制覇への拠点となる日本を自分の目で見てみたいのだ。なにしろ、この作戦は一国の命運に係わるものゆえ、まかり間違えれば、反対に、わが命運をも決しかねないものとなる。それゆえ、絶対失敗は許されないからな。それじゃ、また、連絡する」

議長はいつものように、一方的に言い、姿を消してしまう。彼は議長が消えてしまったスクリーンをしばらくじっと見つめていた。

議長のまえでは、彼は沈着に振る舞っているように必死に装っていた。だが、頭のなかではさまざまな思いが錯綜し、制御を超えて撹乱し、ごっちゃ混ぜになって、ぐらぐらと煮立っていた。

突然現れた議長の意図がなんなのか、いくら考えても分からなかった。いつもなら、議長の顔を見ただけで推察できていたのに、今回はいくら考えてもなにも思い付かないのだ。ただ頭のなかが霧の中に閉ざされている思いだけだった。

それに、山城を処分したばかりのところに、『乗っ取り作戦』実行の命令が出るとは思ってもみなかったことだった。

瞼が開かないときに、議長が突然現れたことで混乱しかけた頭を奇妙な夢と『乗っ取り作戦』が矢継ぎ早に襲い、彼の頭はすっかり混乱してしまった。揚げ句の果てに、議長がやって来るというのだ。彼の頭は完全に沸騰してしまった。

彼はやおら立ち上がると、執務机を離れ、ドアを押し、廊下に出た。

１６

「苦しい。止めろ。死んでしまう……」

「お前なんか、死んだほうがいいのだ」

耀は言い放つ。

「うぅ……」
山城は身体を小さく折り曲げ、必死に耐える。なぜか徐々に心臓を掴んでいる手の力が抜けていった。
彼は次第に生気を取り戻す。身体を伸ばして、耀を振り払うように激しく身震いすると、秘密の扉を開け、エレベーターに乗り込む。
地下一階でエレベーターから降りる。廊下の監視カメラが静かに首を振り辺りを見張っている。彼は身を屈め、監視カメラを避け、自分の執務室に近づいていく。ドアのノブを回す。僅かな隙間から室内を覗く。誰もいないことを確かめると、彼はドアの隙間から身体を押し込む。
ドアに施錠すると、執務机に近寄り、机の上にアタッシュケースを放り出す。そして椅子を引き寄せると、彼は耀の言ったことを思い返す。
何度思い返しても、耀の言っていることを信じる気がしなかった。
「あれは耀の作戦にちがいない」
彼は自分に言い聞かせる。「黒」の同士打ちを促し、「黒」の自滅を図ろうとしているのだ。
こう思い、彼は耀の意図するけしかけを葬り去る。いや、こうして彼は必死に耀の訴えを無視しようとしていたのだ。
だがいくらこう思っても、なぜか耀の言っていることを無視することも、またこれを完全に払拭することもできなかった。それよりも、耀の訴えを忘れようとすればするほど、こころの奥底で「黒」への疑惑が頭を擡げてくるように感じるのだ。
彼には「黒」への疑惑があってはならなかった。もし僅かでも疑惑を持つことは、「黒」の一員として許されることではないのだ。もし疑惑を持てば、彼自身が自分自身を否定することになりかねない。
これまで何年もの間「黒」の一員として存在し生きてきた自分が根底からぐらつき出していた。彼はいま闇の中を彷徨っているように思えた。できれば「黒」への疑惑を完全に払拭したかった。そして「黒」とともに歩んできた自分を肯定し、自分の存在を確かめたかった。
だが疑惑が疑惑を呼び、次第に巨大な疑惑となっていく。そして彼の人格をも否定し去ろうとしているように思えてならなかった。
突然、電話のベルが鳴った。
反射的に手を伸ばす。受話器に指先が触れた瞬間、彼は手を引っ込める。
彼はモニターの電源を入れる。ドアのカメラに切り替え、外の様子を伺う。遠くで人影が動いたように見えた。だがそれっきり動きはない。
「耀の言っていることは本当なのか」
彼は今日一日を思い返し、身に降りかかった一連の出来事を振り返る。
「あの写真が原因だったのか……」
彼には解せなかった。あの場の成り行きで、気軽な気持ちで渡したあの写真のどこにそんな重大な秘密があったのか。彼には全く理解できなかった。こんなことになったのは、なにかの間違いかと思いたかった。
「やはり、この機会に、俺を完全に亡き者にしようとしていたのか。誰が、なんのために、そんなことを……」
彼は二度も殺されかけた自分を思い返した。
突然空中爆発を起こした無人ヘリが目に浮かんだ。空中高く舞い上がった無人ヘリが突然爆発して木端微塵に飛び散ったのだ。さらに、彼をKキャンプへ運んだヘリにも、高性能の爆薬が仕掛けられていたではないか。
やつは一度は無人ヘリに乗せて爆死させ、それが失敗した場合に備え、さらに、ヘリをも爆破しようとしていたのだ。

彼はもはや引き返えすことができないところまで来てしまっていると感じた。と同時に、彼はいま、敵の真っ直中にいることに気付いた。
自分の本拠地だと思っていたKキャンプにすでに手が入っていたのだ。彼がKキャンプに運ばれるまえに、爆薬を装備した無人ヘリが準備されていたことがそのなによりの証拠だった。
迂闊にも、彼は自ら敵中に身を投じたようなものだった。
「どうする、どうすればいいのか」
彼は自分に何度も問う。

17

「危機一髪のところで、ふたりを救うことができました」
未佐はアムンに木実子と森野が灯油をかけられ、火を付けられそうになっていた一部始終を報告する。
アムンは執務机の向こうからじっと目を凝らし、黙って頷いた。
木実子と森野が救急車で病院へ搬送されたことを確かめると、彼女はハクリとともに報告と善後策を協議するために「天の基地」へ戻ることにしたのだった。
「現在、ふたりは集中治療室で治療を受けています。命に別状ないとのことですが、当分入院を要するようです」
ハクリが横から付け加える。
「分かった。ご苦労だった。それで、その大男は何者なんだね」
「母親貴世さんの話では、木実子さんの顔見知りの産廃処理業者らしいということです。警察が探しているようですが、まだ捕まっていないようですが……」
アムンは透明な目をあらぬほうに向け、しばらく口を閉じていた。
「ところで、ヨウはどうしているかな。連絡はないかね」
アムンは未佐をじっと見る。それから目をハクリに移す。
「はい、まだなにも……」
「確か、ヨウは『黒』の山城とかいう男と一緒だったね。オセロ作戦がどこまで進んでいるのか、一度探ってみるといい。最近、なにやら『黒』の動きが変なのだ」
「なにか変わったことが……」
「確証はないが、『黒』の地区本部内部に混乱が生じているらしい。このところ、『黒』のヘリが立て続けに墜落事故を起こしている。それがどうにもおかしなことに、突然爆発して空中分解したり、不意に失速して墜落しているのだ。こんなことは通常滅多に起こりえない。意図的に仕組まれたのかもしれない」
「山城もからんでいるのでしょうか……」
彼女は心配そうな目でアムンを見る。急に耀のことを言いだしたところをみると、アムンはなにかを掴んでいるにちがいない。あれ以来耀からなんの連絡もないことが彼女を一層不安に陥れる。
もし墜落したヘリに山城が乗っていたらと思うだけで、息ができないほど胸が締めつけられる。一体同化している耀も、山城ともども事故に遭い、爆死したかもしれない。もう会うことすらできなくなってしまうのだ。
「ハクリ、耀くんを探しに行きましょうか」
彼女はアムンの目も忘れて、隣のハクリに囁く。

「『黒』にどんな変化が見られるのですか」
ハクリは彼女の囁きには応えず、素知らぬ振りをして、アムンに目を向ける。
「ヨウに聞けば詳しいことが分かるかもしれないが、どうも変なのだ」
アムンにも詳しいことが分からないのか、それともただなんとなく変に感じているだけなのか、それっきり口を閉ざしてしまう。そしてアムンは目を遠くに向けたまま口を開こうとせず、じっと執務机に座って動こうとしない。
「あのふたりも当分動きがとれない状態なので、その間、われわれは山城を探し出してヨウから情報をとることにします。よろしいですか」
しばらくアムンの様子を窺っていたハクリが低い声で言う。
「ああ、ハクリ、頼むよ。それから、ミサ、木実子さんが回復次第接触して例の件を質してみてくれないかね」
「はあ、例の件ですか……。はい、分かりました」
一瞬、彼女にはアムンが耀の父親のことを言っているとは理解できなかった。そのことをアムンがそんなに急いでいるとは思ってもみなかったからだった。今更、彼女にとって耀がＡＩＤ児であろうがなかろうがどうでもよかった。それにＡＩＤキッド使用の前後に接触した男性がいたかどうかを木実子に直接聞きただすことは、たとえ耀のこととはいえ、あまり気乗りしなかった。
だがアムンの深く澄んだ目をした端正な顔立ちを見ていると、このことになにか重大な事柄が隠されているように思えてくるのだった。

１８

執務机の電話が鳴った。代表はいつもと違い、ベルが二度繰り返されるのを待ずに受話器をとった。
「代表、山城チーフの執務室を調べたところ、ロッカーのなかに二人の隊員が閉じこめられていました。命には別状がありませんが、かなり……」
受話器の奥から特別秘書の抑揚のない声が響く。
「なんだと……」
代表は穏やかでなかった。もしかしたら、山城はまだ生きているかも知れないのだ。ふたたび彼の頭のなかが荒れ狂う。
議長のことで彼の頭の中はすでにパニック状態だったのだ。彼は苛々して受話器を叩き付けようとした。
山城へ差し向けた四人の隊員のうちの二人が取り押さえられ、ロッカーに閉じこめられていたのだ。とすれば、他の二人はどこへいったのか。
「山城をヘリに乗せ、Ｋキャンプへ運んだのは間違いないのだな」
彼は大きく息を吸い、受話器を持ち直すと、山城が運び出されたときの様子をもう一度確かめる。
「それは監視役の隊員が確認していますが……」
「事故を起こしたヘリの残骸をくまなく収集して、遺体や遺骸の痕跡がないか徹底的に調べるのだ……」
「現在調査を実行中です。痕跡が見つかれば、すぐＤＮＡ鑑定を行い、身元を明らかにするはずですが、まだ報告が入っていません」
「無人ヘリが爆発したのは間違いないな。それに山城を運んだヘリも墜落したというのだな」

「はい、そう報告がありました」
「そうか。もういい」
受話器が叩きつけられ、音を立てた。
「山城が生きているかも知れない」
こう思うと、彼は居ても立ってもおれず、大型の執務机の回りをぐるぐると激しく歩き回る。山城が生きているかどうかも分からないのに、彼は全く落着きを失い、すっかり動揺していた。
一刻も早く、山城を処分してしまいたかった。だが議長がいつ現れるか分からない。このような状況のもとで、処分を繰り返すわけにはいかなかった。
山城を処分したと分かれば、議長がどう反応するか見当つかなかった。それにその原因が例の写真だと分かれば、ただではすまない。もし情報を隠したと判断されれば、彼自身が追及されることになる。そうなれば彼自身危うくなってしまう。自分の潔白を主張しようにも写真を持っていてはそう主張できないかも知れない。
土台、なぜ一介の隊員がこのような写真をもっていたのか、と問われれば、どうにも応えようがないのだ。
山城を一刻も早く探し出さなければならない。生きているのか死んでしまっているのか早く見極めることだ。
死んでいればしめたものだが、その場合でも議長に気付かれないようにしなければならないのだ。
もし山城が生きていればどうするか。もはや簡単に処分することはできまい。山城は徹底的に抵抗するだろう。そして山城と一戦を交えているときに議長が現れたら、万事休すだ。
かといって、野放ししておくわけにはいかない。あの男のことだから、議長へ直訴するかもしれない。捕まえて、人里離れたどこかに幽閉して置くほかないのか。
それよりも、議長の来訪を阻止できれば一番いい。せめて訪日を延期することができないか。なんとかそうする方法がないか、彼はしきりに考えていた。

第三章

19

「代表、山城チーフがKキャンプにいるらしいです」

特別秘書だった。側近中の側近で、代表の隠れ親衛隊のチーフだ。表情を殺した能面のような面構えの持ち主だが、いつもと違って声がどことなく上ずっている。

「（やはり、生きていたか）……」

代表は受話器を右手に持ち替え、口の中で呟く。声にならない。彼は受話器を持ったまま、しばらくじっとして動かなかった。

それにしても最悪のケースだった。受話器の先で、特別秘書が不動の姿勢でつぎの命令を待っていることは手に取るように分かる。だがいくら考えても、つぎに発する言葉が見つからない。

「分かった。監視をつづけるように」

彼はありきたりのことを言う。

「はあ……」

受話器の奥から気の抜けたような返事が戻ってきた。そこには折角探し出した山城を捕らえようとせずに放置しておくのが不満のような響きがあった。だが咎める気もしなかった。彼はそのままなにも言わずに受話器を電話機に戻す。

なぜか、彼はこれ以上受話器を耳につけていることができなかった。

事故死したはずの山城が生きていたのだ。そのことだけでも激しいショックだった。

彼は一瞬、山城をこのまま放置しておこうかと思った。いまの彼にはそれが一番いい解決策のように思える。

だがそれが最良の策であるはずはなかった。議長はいつ現れるか分からないのだ。このような状況のもとで、一度処刑することにした男を生きていたからといってそのまま放置しておくことは、いつ爆発するか分からない時限爆弾を抱えているようなものだった。それにいつ現れるか分からない議長のことが胸の中で燻りつづけているのだ。

彼は机の天板に広げている白紙に目を向ける。これからの作戦を考えようと用意したものだった。そしてはじめようと椅子を引き寄せたとき、電話のベルが鳴ったのだ。

ふたたび、彼は執務机の椅子を引き寄せる。だが彼の頭のなかは天板に広げた一点の染みもない真っ白な大きな白紙と同様だった。

真っ白い頭にはなんにも浮かばない。だが彼はこんな頭でなんとか考えを纏めようと、白紙を見つめつづけ、必死に考える。

縦軸に行為、横軸に時間をとり、対山城、そして対議長への作戦行動を練るのだ。

まず、山城に対する処分行動を実行し、それが完了してから、つぎに、議長を迎えることができれば、申し分ない。こうするためには、議長来訪スケジュールをこちらで決めてしまうことができなければならない。これは必ずしも容易なことではない。議長は用心深く、事前に行動スケジュールを明らかにしたがらないからだ。

議長がいつ現れるが不明な状況下では、この点を無視して対山城行動を進行させる作戦を採用することはできないのだ。

とすれば、議長がいつ現れるか分からない状況下では、結局、議長の来訪を待つことを優先させるのが一番無難ということになる。だがそれにはつぎのような問題（危険）がともなうのだ。

山城の件をペンディングのままにしていては、来訪中の議長にこのことが知れるおそれがあるということだった。議長の来訪を知って山城が暴れだすかもしれないし、あるいは直訴に出るかも知れないのだ。そうでなくとも、議長自ら方々を見て歩いたときに、山城を見付けるかもしれない。

こんなことになっては厄介なことになる。これを避けるには、どうすればいいか。山城を早く捕まえてしまうことか。そして即座に処刑するか、あるいはどこか人知れぬところに幽閉してしまうことだ。

だが短時間に山城を捕らえることができるか。これに失敗して、延々と山城捕物作戦をつづけるはめになったらどうなるか。不意に現れる議長に見つかる危険がますます増えることになるではないか。

「うむ……」

彼は大きなため息をついた。

２０

「おい、どうするのだ。ここにいつまで潜んでいるつもりか……」

耀には山城がなにを考えているのか分からなかった。Ｋキャンプの施設地下一階にある執務室に入ってから、執務机の肘掛け椅子に腰を下ろし、背にもたれたまま、じっとして動こうとしないのだ。

「……」

彼がなにを話しかけても、山城は徹底して無視しているのか、微動だにしない。

「おい、黙ってばかりいては分からん。お前さんがその気になれば、全力で加勢するぞ。どうだ……」

彼は餌を投げる。

「それはご親切に。それまで言うなら、早く出ていって、俺を一人にさせてくれ。俺はどうなってもいい。もう放っといてくれ」

「なにを抜かすか。お前はここにきて『黒』を裏切ることが怖くなったのか」

「バカ言え、お前を道連れにしたくないのが分からんか。俺はなあ、もっと大きなことを考えているのだ。もうこうなった以上は、代表一人を相手にしてもしょうがない。どうせなら『黒』全体を相手にしたいのだ。分かるか」

「おい、ホントか……」

彼は半信半疑だ。そんなに簡単にいくはずがない。いまだに行動せずにいるところをみると、代表一人でも持て余しているのではないのか。それなのに、ふいに「『黒』全体を相手にしたい」と言う。もしかしたら、山城のやつ、対『黒』自爆テロを考えてるのか。とはいっても、組織の全容すら知らない山城になにができるというのか。

「問題はなあ……。お前も見たろ、俺を襲った連中が催眠状態にあったことを。分かるか。代表一人をやったところで、代表に催眠をかけられた連中がうようよ残っていては、なおさら厄介だ。これを回避するには、代表にこれらの連中の催眠を一度に解かせることが必要なのだ」

「そんなことがどうすればできるのだ……」

「代表を生け捕りするのだ。そして連中全員の催眠を一度に解除させる」
「そんなことが可能か。それに『黒』の全員をどうやって集めるのだ」
「そんなこと簡単なことだ。全員向けにマイクを通してアナンスすればいい。それで十分なはずだ」
山城は『黒』の隊員にはイヤホン装着が義務づけられているので、それ向けに「解除命令」を流せばいいと言う。だが果たして、それだけで催眠状態を解除する効果があるかどうかはやってみなければ分からないらしい。
「たとえそれがうまくいったとしても、日本地区だけだ。世界に広がる『黒の集団』をどうするつもりだ。世界の『黒』が押し寄せてきたら、どう対抗するか」
「バカ、そんなことまで考えたらなにもできない。その時はそのときだ。まずは代表とその一派が相手だ」
「だがうまくいかないときはどうするんだ」
「そのときは別の手を使う。心配するな。こうなったらとことんやるまでだ」
「別の手って、なんだ」
「任せていけ」
「まあいいか。で、どうするんだ」
「見ていろ。いい案がある」
「そうか。分かった。じゃ、一緒に闘うことにするか」
「よーし、お前が加勢してくれるんだな。それならこうだ。俺がおとりになって代表をおびき寄せるから、そのときを狙って、お前は代表の体内へ入る。合図するから、やつの心臓を締め上げるんだ。そして代表に隊員向けの『催眠解除』をアナンスさせるのだ。どうだ……」
「うん。で、どうやってここにおびき寄せるんだい。代表はやすやすお前さんの手に乗るかなあ」
「いまに必ず、代表がここにやってくるから見ていろ」
山城が自信満々に応える。

21

「ハクリ、山城はどこにいると思いますか。耀くんはいまも間違いなく山城と一体同化しているかしら……」
未佐は耀が山城に言いくるめられているのではないか心配だった。いつまでたっても、彼女には幼い耀しかイメージできないのだ。
「うーん、まあ、大丈夫だろ。ミサが考えるほど、ヨウは無思慮じゃない。ああ見えても、ヨウは山城相手にいろいろ考えて手を打っているだろうからなあ」
「そうかしら……」
「まあ、とにかく、ヨウを探そう。それには山城を探せばいいか」
山城がいそうなところをしらみつぶしに当たっていくのだ。ふたりはアムンのもとから日本ブースに戻り、スクリーンに画像を映し出す。
まず、『黒』の本部だ。都心の高層ビルに本部が隠れて置いてあるという情報を得ていた。高層ビルに焦点を合わせていく。
「多分、大手の化学工業会社かその業界団体が入っているビルだろうな」
ハクリはいくつか目星をつける。それを目当てに乗り込もうというのだ。
「ハクリ、それはムリよ。それらしいビルが見つかっても、実際、どうやっ

て山城を探すの。わたしたちは受付で尋ねるわけにもいかないし……」
「天」の世界に属する未佐やハクリは現実界の人びととは直接会話することができないのだ。耀と山城のケースのように、現実界の人（山城）と一体同化すれば、当人同士間の会話が可能となる。通常は姿も透明で、現実界の人びとには彼らを見ることができない。
「ビルの中へ入っていってくまなく探すほかない」
「山城が本部にいるとは限らないし……」
「……」
「それにそこにいる人びとがすべて『黒』の隊員とは限らないわね。ビル全体が『黒』の本部であれば別だけど……」
「高層ビルの一部を借りているのかもしれないな」
「そうだわ。ね、ハクリ。Kキャンプの例の施設へ行ってみましょう。そこで山城の居場所を尋ねるのが一番早いわ」
「なんだって……」
「そこで『黒』の隊員を掴まえて、一体同化するのよ。そして山城に連絡するようにすればいいんじゃないの」
ふたりはKキャンプへ向って「天の基地」を飛び立った。

２２

「山城を見付けました。施設の彼の執務室に閉じこもっています。完全に包囲して、監視をつづけています」
抑制のない特別秘書の声が響く。
「そうか」
代表は短く応え、受話器を置く。彼はもう一度特別秘書の声を思い返す。早く行動を起こしたほうがいいと言っているようだった。
だが彼は躊躇してしまう。なぜが気が進まないのだ。かといって、このまま山城を捕まえずに放置しておくことはあまりにも危険が多すぎる。
彼は迷った。時間が過ぎていく。彼は執務机の回りを歩きつづける。まるで答のない問題を解いているようだった。
同じところを回りつづけているうちに、このまま、山城をKキャンプに幽閉しておくのが一番いいように思えてきた。彼はようやく椅子に腰を下ろす。
突然、電話のベルががなり立てる。
予期しないベルの大きな音に、彼は思わず、飛び跳ねるように椅子から立ち上がる。反射的に手を伸ばしかけたが、彼は忌忌しげに電話機を一瞥しただけで、手を引っ込めてしまう。
ベルは執拗に鳴り続ける。二度、三度、そして四度……。
四度目が鳴り了えたところで、彼はようやく受話器を取って、耳に当てる。いくら待っても、なんら応答がない。無言電話か。
しばらく耳につけていた受話器を電話機に返す。その途端に、ベルが鳴った。
彼は目を釣り上げ、素早く手を伸ばすと、受話器を掴み、僅かに持ち上げる。そしてすぐ電話機に返す。ベルが切れた。
数秒間、静寂が戻った。だがふたたびベルが鳴る。まるで彼をあざ笑うように、まえより数段高く響く。
受話器を鷲掴みすると、彼はすぐさま電話機に叩き付けた。

またベルが鳴った。受話器を取る。相変わらず、応答がない。彼は受話器を電話機から外したまま、天板の上に放置する。
受話器は天板の上に置かれたまま死んだようだった。ビクともしない受話器を彼はじっと見つめる。そのとき、彼は受話器の先に広がる闇を覗いていたのだ。
不意に、闇の中で人影が動いた。
「おい、山城じゃないか」
一人の男が振り向く。山城の精悍な顔ではなかった。表情のない能面の男だった。
「なんだ、お前は……」
男は彼をじっと見つめているだけで口を開かない。
「なんの用だ……」
男の身体が揺れた。男の陰から男が現れた。一人の男の後ろにもう一人の男が隠れていたのだ。
「どうしたのだ、お前たちは……」
能面の男たちはいつのまにか四人になっていた。
「……」
彼は身震いしながら、横目で四人の顔を覗く。山城に差し向けた男たちなのか。
四人のうち、二人はロッカーで息絶え絶えの状態で発見された。残りの二人はまだ戻ってこない。
彼はブザーを押す。
「なにか、ご用ですか」
「来てくれ」
特別秘書が飛んできた。
「どうかなさったのですか、お顔の色が……」
「ロッカーで見つかった男たちはどうなったか」
「医務室で手配した救急車で病院へ搬送されたそうですが……」
「やはり、そうっだったか。で、残りは……」
「残りですか。二人だけじゃなかったのですか」
彼はじっと特別秘書を見た。山城に四人の男を向けたことをこの男は知らなかったのか。黙っていてもすべてを把握していると思っていたが、やはり秘密主義の弊害か。
「山城は……」
「Kキャンプに……」
「それは分かっている。どんな状態か。監禁というより、やつは執務室に籠城しているのではないか」
「はい、山城チーフのことですから、そういったほうが適切のようですが……」
「そこにいつまでも籠城されては困るのだ」
「なにか不都合なことでも……」
彼はもう一度特別秘書に目を向ける。この男は口が堅いか。あからさまに話してみるか。それとも秘密にしておくか。
「他言は一切無用だが、議長が現れるかもしれないのだ」
彼の口がひとりでに動いた。そして必死に秘密にしておこうと思っていた議長の行動スケジュールが口を突いて出た。
天板に放置されたままの受話器が、一瞬、かたりと音を発した。
その瞬間、特別秘書は素早く手を執務机の天板の上に投げ出されている

受話器に伸ばす。受話器を急いで取り上げると送話口を掌で塞ぐ。
特別秘書は二人のやり取りが洩れていることに気付いたらしく、代表の目をじっと見ている。
「おい、どうしたのだ。その電話、無言電話だ……」
「もしかしたら、いまの話傍受されていたかもしれなせん」
特別秘書は受話器をすぐさま電話機に返えしてしまう。
「えっ……、どこからか分からないか」
「電話番号が記録されているはずですが、調べておきましょう」
「傍受されていたかも調べてくれ。傍受されておれば一刻も猶予ない。すぐ手を打たなければ……」
特別秘書はあたふたと代表の執務室を出ていった。

２３

「あの森だったわね」
未佐とハクリが急降下をはじめる。見覚えのある方形の屋根が間近に迫ってきた。ふたりは煙突の近くに降り立つと、煙突から内部へ入っていく。
内部はまえに木実子と森野の救出に来たときとなにも変わっていなかった。
暖炉から中央の大ホールを通り抜け、エントランスホールに出る。そこからロビー横の壁に仕込まれた秘密の扉を開き、地下への非常階段を下りていく。
階段の踊り場から非常扉を開けて地下一階へもぐり込む。廊下の左手の奥に山城の執務室があるはずだ。
廊下にはいくつも扉が並んでいる。ひとつの扉のまえに迷彩服の男が立っている。ふたりは近付く。男には透明なふたりが見えない。
「ここね。ハクリ、あの男を眠らせて……」
つぎの瞬間、スローモーションを見ているように、男がゆっくり後ろへ倒れて、廊下に仰向けに長々と伸びた。
彼女はドアの隙間から、執務室へ入り込む。
一瞬、気配を感じたのか、壁を背にした執務机の男がドアのほうに目を向けた。
「あの男が山城ね」
後ろにつづくハクリに声を掛ける。木実子たちを救出したとき、ハクリは山城を投げ飛ばしている。
「……のようだね」
ハクリが男に近付き、撫でるようにして確かめ、大きく頷く。
「耀くん、出てらっしゃい。ハクリとわたしよ」
頷くハクリを見て、彼女は大声で叫ぶ。だが男は何事もなかったように平然としている。男にはふたりの姿も声も聞こえていない。
「ミサ、ヨウにもなにも聞こえまい。わたしが男のなかに入ってヨウを呼び出してくる。待っていなさい」
ハクリは男に近付く。ハクリが消えた。直ぐ戻ってきた。
「どうだった。耀くんは……」
未佐がハクリに迫る。
「元気そうだった。すぐ現れるよ」
ハクリは男を見守る。耀が男にハクリたちのことを話しているのか、男

は盛んに辺りを見回している。
しばらくして、耀が現れた。
「耀くん……」
未佐は耀の手を取る。声を詰まらせ、話ができない。
耀はハクリと未佐とに交互に目を向け、懐かしそうに笑みを浮かべる。だがすぐ真顔になり、これまでの一部始終を話しだした。それから、これからはじまる山城と代表との闘いについてつづける。
「ようやく代表と闘う気になっています。ところが最近の情報によると、近々、『黒』の議長が日本に来るらしいとのことで、このことが絡んで、この闘いがいつはじまるか、また、どんな闘いになるかも皆目分かりません。代表は議長来訪まえに決着を付けたいところでしょうが、それができないと分かれば、当分は睨み合いということになりそうです。こちらサイドは（実は、山城に加勢しようと思っているのです）、先に攻めるべきか、それとも、代表が攻めてくるのを待つか、検討しているところなんです」
「山城が一人で代表と闘うわけなの。代表には大勢の手勢がいるんでしょう。それで大丈夫なの……」
「いろいろな作戦が……」
「ハクリ、わたしたちも山城に加勢しましょうよ。どうかしら……」
「いいね。でも、議長も一緒のほうがやりがえがあるんじゃないかな」
「まあ、耀くん、どうする……」
「ありがと、山城に伝えておくよ。じあ……」
耀の姿が消えた。

24

「代表、無言電話の発信番号が分かりました」
受話器の奥から特別秘書の抑揚のない声が響く。そして急に声を潜め、発信番号はKキャンプの施設のものであり、無言電話の主は山城じゃないかと言う。
代表はしばらく受話器を耳につけたままでいる。特別秘書の息遣いが洩れてきた。それでも彼は動かなかった。いや、身体全身が硬直して動けなかったのだ。
無言電話の主が山城だとすると、議長の来訪も山城に知られてしまったのか。彼は筒抜けになってしまった特別秘書と交わした会話の内容をいちいち思い起こし、チェックを繰り返す。
やはり、議長の来訪の件が洩れていたらしい。とすれば、一刻も早く、山城の口を封じなければならない。
彼は身を起こし、椅子から立ち上がる。まだ手に受話器を握りしめていることに気付き、電話機に返えそうとして、慌てて受話器を持った手を伸ばす。電話機に返す寸前で、彼は受話器の向こうにいる特別秘書の気配を感じ、もう一度耳に受話器を近づける。
「ああ、山城の居場所は……」
「施設地下一階の……、実は……」
「分かった。すぐ、やつを捕らえるんだ。抵抗したら……」
「実は、見張りのものが何者かによって襲撃を受けたそうです」
「山城がやったのか」
「そうではないそうです」

「誰だ、それは……」
「不意に急所を突かれて、失神したということですが……」
特別秘書は山城を容易に捕まえることができないと言いたいらしい。
「Kキャンプにやつの息のかかった部下がまだいるということか。裏切り者め。チーフ山城の権限剥奪を徹底させろ。とりあえず、お前が兼務するのだ。そして生死を問わず、山城を即刻逮捕するんだ。命令だ」
彼が受話器を勢いよく電話機の戻した。

２５

「誰だ。誰かと話していたようだが……」
山城だった。戻ったのが分かったらしい。耀は未佐やハクリのことをどう話そうかと、一瞬、迷った。
多分、どう話してみても、山城には理解不能にちがいない。かといって、話さないでおくわけにもいかなかった。闘いの最中にふたりが加勢のために紛れ込むことも考えられるからだ。そのとき、敵か味方か分からなければ、同士打ちしてしまうかもしれないのだ。
「仲間と会った」
彼は最小限度にとどめることにした。
「ドアの前の見張りに感付かれなかったか」
廊下で迷彩服の男が執務室への出入りを見張っているのだ。
「大丈夫。ぶん殴ったら伸びてしまったらしい」
「なんだと、それはまずい」
「なぜだ……」
彼は目をしかめる。
「俺がやっていないことが分かれば、Kキャンプに俺に与するものがいると誤解し、犯人探しがはじまる。そのために、代表は自分の息のかかった能面の一隊を送り込んでくることだろう。もしかしたら、一気に攻め立てるかもしれない……」
山城は議長がいつ出現するか分からない状況では、代表は一刻も早く決着をつけたいはずだと言う。そして長引くようになれば、焼き打ちをかけてくるかもしれない。
「そうかなあ……」
「まあ、ここで籠城をつづけていても勝ち目はないな」
山城はあっさり言ってのける。
「じゃ、あっちが動き出すまえに、こちらから仕掛けてはどうか」
「なにをどう仕掛けるんだ」
「こちらから代表のところに乗り込んでいくのはどうか。そして代表を生け捕りにするんだ」
「生け捕り？　そしてどうするんだ」
「コントロール下に置くんだ」
「なんだって……」
「一か八か、やってみては。われわれが加勢すればなんとかなるぞ」
「……」
山城がじっとして動かない。考え込んでしまったらしい。

26

「アムン、ヨウと会ってきました」
「あ、ハクリか、ミサも一緒だったのかね」
ハクリが未佐を従えて、目のまえに立っている。アムンは執務机から顔を上げ、突然、現れたふたりに驚き、目を見張る。
そんなことに頓着せず、ハクリは耀と会った一部始終を報告する。そしてふたたび戻り、耀に加勢したいと言う。
「そうか。とにかく、ヨウは元気だったんだね」
「はい、耀ちゃんは、あっ……、耀くんは思ったより元気でした。それにオセロ作戦のほうも……」
未佐が執務机に身体を乗りだす。
「順調なんだっね、大したものだね」
アムンはハクリに目配せしながら、大げさに言う。
「ところで『黒』の議長が訪日することが本当なら、山城を軟禁状態でこのままいつまでも放置しておくことは考えられません。代表は即刻、山城の処置処分に取り掛かるにちがいありません。これに対して、山城は徹底的に抵抗することでしょう。とすれば、代表対山城の闘いとなりますが、われわれはどんなかたちで山城に加勢すればいいのでしょうか。山城にどんな考えがあるのか分かりません。ヨウはこのことに関してなにも話さなかったのです……」
ハクリは未佐を抑えるように静かな口調で言い、アムンに目を向ける。
アムンはときどき頷きながら、黙って聞いている。
ふと、天板に目を落とす。そして手をすっと伸ばすと、目に見えないほど細く長いものを摘み上げた。一本の髪の毛だった。
未佐は慌てて手を伸ばし、アムンから髪の毛を取り上げようとした。そのまえに、アムンが手の髪の毛を目に近づけ、じっと見る。
「これは……」
「すみません。身を乗り出したとき、わたしの頭から……」
「いや、ミサのものじゃないようだ」
「……」
「ヨウのものかね」
アムンは引き出しから小さなプラスチックの袋を取りだすと髪の毛をそのなかに収める。そして大事そうに引き出しに仕舞ってしまう。
「それで……」
アムンは何事もなかったなかったように、ハクリに目を向け、つぎを促す。
「代表側の動きを掴まえ、ヨウ（山城）と連絡を取りながら、山城に加勢することにしたいと考えています。なにしろ、議長が来日するとか……」
「そうだね。いつ現れるか分からないんじゃ、事前に手の打ちようがない。そのときどきに臨機応変にやるほかないか。だがなぜ議長がわざわざ日本に来るというのかね」
アムンは遠くへ目を向けた。その透明な目がますます透き通り、まるで目が遠くの獲物を捉えているように見える。
「もしかしたら、日本地区内部の混乱を感付いて……」
未佐が口を挟む。
「代表と山城の争いのことで……。まさか、そんなことで議長がわざわざ来るとは思えませんが……」

「ハクリもそう思うかね。もっと重要なことかもしれないね。議長が直々に重大な命令を伝えるためにやってくるとなると……。一体、それは……。日本での戦略の見直しかな。いや、もしかすると、世界戦略の見直しや変更かもしれない……」

アムンは推測だがと断わりながら、つぎのようなことを言いだす。

日本が世界の先進諸国の一員であること、そのうえ、島国であり、周囲を海洋で囲まれ、地形的に隣国と隔離されている条件にあることを利用して、これまで「黒」は日本社会を対象にさまざまな先進的な社会実験を行なってきた。ことに、最近、化学合成物質Ｘの人体実験を密かに行い、日本成年男子の精子の減少しだしていることを確認している。これで日本人口は今後確実に減少傾向を辿ることが確実視されることになった。

「この社会実験はここで終了して、つぎの段階である『乗っ取り作戦』へ進む予定であったようだが、これを見直すことにしたのかもしれない。多分……」

アムンはつづけてこんなことを言う。

世界帝国建設の足がかりとして、日本の乗っ取りを計画していたが、議長はその必要性に疑問をもったのかもしれない。日本はこのまま進めば確実に弱体化する。とすれば、ここでなにも攻撃的に乗っ取る必要もない。それよりも、世界に向けて社会実験の成果を実施に移したほうが手っ取り早い。そうすれば世界制覇が早まるということだ。

「このまま進めば、日本が確実に弱体化するのですか……」

未佐だ。彼女は納得できないのだ。

「そうだ。ほぼ間違いない。日本はすでに化学合成物質Ｘの汚染地帯だ。これで日本に住む成年男子の精子が激減するだろう。日本では、化学合成物質Ｘのほか、さまざまな化学合成物質による汚染が進んでいる。これらの複合汚染の影響のために、ことに新生児や幼児にはさまざまな影響が出てはじめている。幼稚園や小学校低学年の年少児にも影響がおよんでいる。化学合成物質の複合影響ばかりでない。これに加え、通信や送電、あるいは電気器具などから発生する微弱な電磁波や原発事故からの放射能汚染などとの相乗効果も考えられるのだよ。現代科学ではこのような複合影響やさまざまなレベルの電磁波との相乗効果についてもまだまだ解明することができないのだ。まだ解明されていないだけなのに、解明されていないから無害だと思い込ませたり、チェックも敢えてしようとしない。そしてこのような化学合成物質をナノレベルにして効果を高め、薬品や食品添加物として、または農薬や殺虫剤、あるいは化粧品や洗剤、ワックスなどの日常家庭用品としてじゃんじゃん使っている。これでは影響が解明されたときにはすべてが手遅れとなっているだろうね」

「どんな影響が……」

「さまざまだが、脳や中枢神経などへの影響が大きいと思う。それに発生段階での影響もかなりあるようだ。発達障害や造血機能への影響も考えられるし、肺や血管などの循環器系への影響も考えられるだろう」

「それで日本が弱体化するのはいつ頃からなんですか……」

「もうすでにはじまっている。ヨウやミサもその犠牲者のひとりかもしれないが、すでに、日本の若者たちはただただ日々情報の大波に呑まれるだけで自ら考えようとしない。彼らの思考力低下が著しい。これもさまざまな化学合成物質の複合影響と思われるが、日本の未来にとってこれは極めて危険な兆候だよ」

「……」

「一寸、喋りすぎたようだ。ところで、ハクリ、山城（ヨウ）のことだが……」
アムンは不安気にじっと見つめる未佐の目に気付いて、目をハクリに向け、話題を変える。
「はい……」
「議長が来日するとすれば、そのまえに山城を処分しようと急ぐだろう。とすれば、山城サイドで考えられる作戦は長期戦に持ち込むことだ。山城には長期抗戦が可能かね。なんとか議長が現れるまで持たせることができればいいのだがね。いまの居場所が相手に分かっているなら、早く居場所を変えることだ。そして相手の目をくらますことだ。相手がどんな手を打つか分からないが、火攻め、水攻め、ガス攻め、コンクリート生き埋め攻めなど、あらゆる手段を弄して攻めてくることは間違えないだろう」
「居場所を変えることができればそのほうがいいですね。でもあの建物の周囲はすっかり包囲されていて、そこから逃げ出すことはムリじゃないかと思いますが……」
「それなら、いまいる部屋から別の部屋に移るだけでもいい。勿論、外へ出るのがベターだが……」
未佐は身体が震えるのを覚えた。耀が山城とともに火に焼かれ死んでしまうのか。それとも水攻めか。あるいは生コンクリートで生き埋めされるのだろうか。
「分かりました。直ぐ行って、ヨウと長期抗戦の可能性を探ります」
ハクリは未佐に目配せすると、アムンの執務室を飛び出す。

27

「代表……」
特別秘書が血相を変えて飛び込んできた。
「どうした……」
代表は執務机に座ったまま、顔を上げる。
「Kキャンプで反乱の動きがあります。実は……」
「施設を包囲しているのではなかったのか」
「包囲している一部のものがKキャンプと施設をマスコミに公開しようとしているようです」
「われわれの組織の秘密を暴露しようというのか」
彼は身の凍る思いがした。このことが議長に知れたら、即刻首を刎ねられるにちがいない。
「……」
特別秘書は口を固く閉ざし、身動きしない。
「秘密が漏れるまえにすべての反乱分子を捕まえ、洗脳するのだ。早く、行け」
彼は特別秘書に命じる。
「……」
特別秘書は返事もせず、固まってままだ。
「おい、どうした……」
何度命じても動こうとしない。彼は一瞬、この男までが反抗しようとしているのかと思う。
「自分がここを離れては、代表は裸同然になります。山城がやってきたら、

どうなりますか。自分はここを守ります」
特別秘書は毅然として言いきる。
「なんだと。Kキャンプをこのままにして……」
彼は一呼吸おいて、つづける。
「……秘密が漏れるまま、Kキャンプを放置することはできないのだ。日本地区の秘密を守ることは地区代表に課せられた最優先すべき責務なのだ。わたしもKキャンプへ行こう。そして山城と対決する」
「山城を成敗できればいいですが……」
特別秘書の声が冷ややかに響く。
「お前はどう考えるのだ……。俺が負けるとでも思っているのか」
彼は特別秘書を一瞥すると、目をあらぬほうへ向けてしまう。いつのまに、この男はこんなことを言うようになったのか。ふと、彼は山城を思い浮かべる。あのやつもずけずけものを言うやつだった。
「いっそのこと、施設に火を放ち、燃やしてしまったらどうですか」
特別秘書は傲然と言い放つ。
彼はじっと特別秘書の薄っぺらな横顔を見る。この男はKキャンプやその施設のことはなにも知らないのだ。施設の地下構造はもちろん、そのなかに隠されているもろもろの物資や設備などが跡形もなく燃え尽きると思っているのか。火事になったら、これらがすべて白日の下に曝されるのだ。Kキャンプの存在すら秘密にしているのに、自らこれを暴こうというのか。
この男は忠義面をして、俺の失脚を狙っているのじゃあるまいな。もしかしたら、山城より質が悪いかも知れない。この男にも早いとこ、絶対服従の催眠をかけておこう。反抗心を早期に摘み取るのだ。
「とにかく、山城を施設から一歩も出すな。そして生け捕りしてこい。火をつけたり、爆破したりするな。Kキャンプの存在が世の中に知れ渡るようなパフォーマンスは一切厳禁だ。分かったな。さあ、行け」
「代表の護衛が……」
まだ動こうとしない。
「心配無用だ。直ぐ、行くんだ」
彼は特別秘書から目を離すと、机の上の書類を捲り始める。特別秘書はようやく諦め、背を向けた。

２８

「ハクリ、ヘリコプターが来るわ。どこへ行くのかしら……」
「多分、Kキャンプへ隊員を運んで来たんだろう。ミサ、先にヘリポートへ行って、何人乗っているのかチェックしておこう」
ハクリはスピードを上げる。未佐がつづく。
真下に施設が見えた。ふたりは急降下して、屋上に降り立つ。
ヘリがヘリポートに近付く。着陸態勢に入る。
近くにふたりが立っていることにも気付かず、ヘリはヘリポートの真ん中に着地すると、プロペラの回転を止める。
ふたりはヘリのそばに寄り、扉が開くのを待つ。だが扉がなかなか開かない。
未佐が痺れを切らし、窓からなかを覗く。操縦士のほかに、若い男が乗っている。それもビジネスマン風のスーツ姿の男が一人しか乗っていない。

男は操縦士に指示を出しているのか、盛んに口を動かしている。
「隊員を運んできたんじゃないわ。ハクリ、日本地区代表かしら……」
「なさそうだ。なにしに来たんだろうな。あんな格好で……」
「どうしますか、ハクリ」
未佐は目を窓にくぎ付けしたままだ。
ふたりにはヘリの会話は聞こえない。ヘリの二人には外のふたりの話も聞こえないし、姿も見えない。
「このヘリを乗っ取ろう。扉が開いたら、なかの二人を襲おう。そしてこのヘリで山城（ヨウ）を脱出させよう」
「二人は……」
「ロープでぐるぐる巻きにして機内に置いておけばいい。口はテープで塞いだほうがいいか」
ふたりは扉が開くのを待つ。だがなかの二人の話がなかなか終わらない。
突然、男が立ち上がった。身を屈めて、扉に近付く。扉が僅かに開いた。ハクリがすーと流れるように動いた。
次の瞬間、男は前のめりに倒れた。身体が扉を押した。左肩が扉のフレームに触れ、そのまま崩れるように床に落ちた。
操縦士が振り返った。席から身を起こし、男に近寄ろうとした。その瞬間、ハクリは一撃を加える。
操縦士も前のめりに倒れ、男に折り重なるように床に落ちた。
未佐は機内に飛び込み、ハクリとともに、伸びた二人をロープでぐるぐる巻きにしていく。そしてふたりの口にガムテープを貼り付ける。
ふたりは煙突から施設の内部へ突入し、地下一階へ急ぐ。山城の執務室の見張りが一人増えて二人になっていた。
ハクリは一瞬のうちに、二人の見張りを宙に飛ばす。コンクリートの床に叩き付けられ、二人は長々と伸びてしまった。
「どうしたのですか」
耀が顔を出した。ハクリが山城の身体に入り込み、呼び出したのだ。
「いま、屋上のヘリポートにヘリが待機している。山城を連れて、ここから直ぐ、脱出するのよ」
未佐が一部始終を手早く説明する。耀が山城に戻る。
「ケン、直ぐ、脱出だ。危険が迫っている。早くしろ。早くったら」
「なんだ。急に……」
山城はきょろきょろ辺りを見渡すが、なにも見えない。半信半疑だ。
「屋上にヘリが待機してあるのだ。ヘリポートへ急ぐんだ」
山城は机のうえに投げ出しているアタッシュケースの把手を握ると、ドアに近づき、そっと押した。見張りの二人が伸びている。それを見た途端、山城は走り出した。
非常ベルがけたたましく鳴りだした。
山城は非常階段を三段ずつ飛び上がる。
二人の迷彩服が追いかけてきた。手を伸ばして、山城の足を掴まえようとする。
つぎの瞬間、迷彩服が階段からのけ反った。そして後ろにつづく男にうえに落ちる。後続の男を巻き込み、二人が団子になって階段を転げ落ちていく。
屋上のヘリポートに駐機しているヘリに飛び乗る。山城はヘリの操縦席にもぐり込み、エンジンを始動する。

数人の迷彩服の男が現れた。離陸させまいと、ヘリに近付く。だがヘリに近付く迷彩服の男たちは次々に投げ飛ばされて宙に舞う。ハクリだ。
「仲間が加勢してくれている。ケン、いまのうちに伸びている二人を催眠状態にしたら。そうすれば、代表のいる本部ビルへ直行できる」
耀が囁く。山城は通路に伸びている二人を一瞥し、アタッシュケースを開く。催眠剤スプレーを取り出すと、手際よく二人の鼻腔に薬剤を吹き込んだ。そして操縦席に戻ると、エンジンのパワーをアップし、舞い上がる。

２９

「ミサ、追いかけていってみようか」
ハクリはミサを促し、舞い上がる。
施設が眼下に見える。屋上のヘリポートには数人の迷彩服の男が伸びていた。新たに数人の男が屋上に現れた。だが飛び去ったヘリを追うような動きはなく、ヘリポートに伸びている男たちに近寄って手当てをはじめる。
「ヘリはあっちの方角だな」
ふたりは施設上空を離れ、ヘリを追う。
前方に機影が微かに見えた。ヘリだ。森の上空を木々すれずれに飛んでいる。
「随分、低空を飛行しているようだけど、木にぶつかりそうで危ないわ。どうしたのかしら……」
ミサが不思議そうに呟く。
「着陸しようとしているのかな。急ごう」
機影が消えた。
「ヘリが見えないわ……」
ハクリは返事する代わりに未佐の背を押す。
森のなかにそこだけが木々がなく、草原が円形に広がっていた。前面に灌漑用らしいかなり大きな池があって、水を満々と湛えている。
草原のほぼ中央にヘリの姿があった。ヘリは木陰に隠れるように着陸していたのだ。
未佐とハクリがヘリの間近に寄って、扉が開くのを待つ。だがいくら待っても扉は開かない。痺れを切らして、未佐がヘリのステップに足をかけ、内部を覗く。
機内では山城らしい男が蹲って床に放り出された二人の男をかわるがわる覗き込んでひとりずつチェックしていた。床の男はハクリと未佐がロープでぐるぐる巻きにした操縦士とスーツ姿の男だ。
「山城のやつ、なにやっているんだ。ミサ、なかへ入ってみるかね」
ハクリが未佐を突っつく。
「山城がこっちに来るわ……」
未佐がステップから飛び降る。
扉が開いて、山城が顔を出す。目の前にいるふたりには全然気付かない。しばらく回りの様子を窺ってから、顔を引っ込めると、ぐるぐる巻きの二人を機外に引きずり出した。草原に離れ離れに放り出すと、ふたたび機内に戻った。
アタッシュケースを持って来ると、ロープ巻きの男の一人に近付く。操縦士だ。そしてその口からガムテープを剥がした。そして男に訊問をはじめる。

「いいか。訊いたことに答えるんだ。この仕事は誰に命じられたのだ。代表か、それともこの男か」
山城は顎で少し離れたところに横たわっているスーツの男を指す。
男は目を剥いて、口を開こうとしない。
山城はアタッシュケースから茶色のスプレー缶を取り出すと、口を押さえ、手で男の鼻を摘む。しばらくして、手を放す。深く息を吸い込んだときに、しゅーと鼻腔に向けてスプレーする。
男は目を白黒させてもがく。しばらくして、力が抜けたのか、ぐったりした。
「誰に頼まれたんだね」
操縦士の男はスーツの男に目を向ける。
「代表からの命令ではなかったのか。で、この男がお前になんと言ったのか」
「Kキャンプへ行って、ひとを連れて帰る。これは代表の命令だ」
「この男がそう言ったのか。それで、ヘリの整備点検はお前が自分でやったのか」
「専門の整備士がいる。一応、点検はするが、今回は急な話で、直前にはとくにやっていないが……」
操縦士の顔に一瞬、不安気な表情が走った。
「操縦していて変なことはなかったか」
「……」
山城は催眠剤が詰まっているスプレー缶を取り出すと、ふたたび男の口を押さえ、鼻を摘む。息ができなくて苦しくなるときを見計らって、手を放し、スプレーする。
「いいか。これからは俺の命令に従うのだ」
「……」
男は微かに頷く。
「ヘリを徹底的に点検するんだ。時限爆弾が仕掛けてあるかも知れないからな」
山城は男のロープを解く。男はしばらくきょとんとしていた。ようやく状況を理解できたらしく、のっそりと身体を起こすと、ヘリの点検をはじめる。山城はそばで男の動きをじっと見守っていたが、しばらくしてスーツの男に近付いていった。
スーツの男も首を伸ばして、操縦士の動きを追っている。
「おい、よく見ておけ。いまに面白いことがはじまる」
「これがありました……」
機内を点検していた男が手に小さな電子機器らしいものを持って降りた来た。
「なんだ、それは……」
「カメラと発信機らしいですが……」
「それだけか。外回りを調べるんだ。胴体の下はどうだ……」
「あ、これは……」
手に化粧石鹸大の物体を持って飛び出してきた。
「おい、危ない。ダイナマイトだ。こっちに寄越せ」
山城は操縦士の手から物体を奪うと、一目散に池へ走る。そして池の中央めがけて物体を投げる。高々と空をきって物体は微かな音を上げて池へ落ちた。
つぎの瞬間、轟音がして水柱が立った。

操縦士は青い顔をして棒立ちになっている。
「やはり、そうだったか」
山城は呟くと、スーツ男を振り返る。男は血の気のない薄っぺらな顔に薄笑いを浮かべている。
「おい、分かったか。このヘリは地区本部ビルへ帰り着くまえに爆破して空中分解する仕掛けになっていたのだ。お前も操縦士も、そしてそこに乗せられる予定の俺も、みな一緒にお陀仏になるところだっだ。一体、これを仕掛けたのは誰なんだ。お前は知っているのか、それともなにも知らなかったのか」
山城はやおら茶色の缶を掴み、男の鼻を掴む。血の気のない顔が紅潮しだしたところで手を放し、右鼻穴に缶のスプレー口を付け、左鼻穴を押さえ、鼻腔一杯にスプレーする。男は直ぐぐったりして頭を落とす。
「おい、いつまで眠っているんだ」
山城は男の頬を叩く。目を僅かに開く。
「知っていたのか、それとも知らなかったのか」
「うう……、なにも知らなかった……」
「やはり、そうか。あの男は自分の特別秘書で親衛隊長でもある男まで亡き者にしようとしていたのだな。全く、猜疑心の塊のような冷酷きまわりない男だ」
山城は独り言のように呟く。そして催眠剤のスプレー缶を掴むと、スーツ男の鼻を摘み、茶色の缶のときと同じように、鼻腔に一杯吹き込む。それから、操縦士を呼び、スーツ男のロープを解かせた。
「いいか。このヘリで地区本部へ戻るのだ。戻ったら、代表に『山城を生け捕りにしました』と言え。そして『負傷しており、連れて帰るのは無理な状態なので、Kキャンプの施設に監禁してある』と言うんだぞ」
二人の男は山城の言うまま、ヘリに乗り込んだ。

３０

「ハクリ、こんなことだよ」
山城の行動を見ているハクリと未佐に気付いて、耀がふたりのまえに顔を出した。そしてこれまでのことの一部始終を説明する。
「分かった。ヘリの二人は催眠状態で、山城の意のままなんだな。ところで、これからどうするんだ」
「うん、だが離れてしまっては、山城からどうすれば指令できるか……」
「そうか。新たな指令はムリということか」
「ヘリが動き出すよ」
ヘリのプロペラが回転し始める。
「これに乗っていけば、地区本部へ行けるわけだ。ミサ、行こう」
「本部へ？　それでどうするのですか」
「スーツの男が代表の特別秘書なら、代表の部屋にフリーパスで入れるし、代表に会うこともできる。そうできれば、わたしもヨウと同じように、代表と一体同化を試みる。代表を意のままにコントロールすることができるようになるかもしれないではないか。だがそう容易いことではないだろうな。だが、やってみよう。ところで、総本部から議長が来るというんだな。それは『黒』の世界組織を潰滅させる千載一遇のチャンスだ。『天の組織』としても、このチャンスを逃がすわけにはいかない。ヨウ、いいね。とに

かく、議長に来日してもらわないとな。このためには、代表と山城の抗争といった日本地区本部の異変を一切悟られないようにしておかないと……。われわれはよく連絡しあって協力しよう。わたしとヨウの連絡はミサが担当する。山城によろしく。じゃ、ミサ、参ろうぞ」

ハクリは時代劇の役者の科白を真似てミサを呼び、ヨウに別れを告げると、ヘリに飛び乗った。

ヘリは草原から垂直に上昇すると、地区本部を一直線にめざした。

31

「仲間が一緒に本部へ向った。代表に会うのだそうだ……」

耀は山城のもとに戻ると、ハクリとのやり取りを報告する。

「なに、代表のなかに潜り込もうというのか。だが代表は用心深いぞ。それでヘリに乗っていったのか。どうして止めなかったのだ……」

山城は激しく問い詰める。

「……」

なぜだ、と言い返そうとしたが、山城の心臓が激しく波打つのを感じて、彼は口を噤んでしまう。

「もしかしたら、あのヘリは途中で墜落させられるかもしれないのだ。まえのヘリも十分チェックしたのに、墜落したではないか」

「そのときはそのときだ。われわれにはいくらでも対応策がある。それよりもこれからどうするんだ。お前さんは監禁されていることになっているのではないか。Kキャンプへ戻るのか。こんなところにいたら、すべてがばれてしまう」

ヘリが地区本部に到着するまえに行動を起こさなければ手遅れになってしまうにちがいない。ヘリが地区本部ビルに無事到着するかを案じる山城の心配をよそに、彼は一刻も早くここから移動したかった。気が気でなかった。

「いいや、俺は地区本部へ行く。そしてビルに潜り込むんだ」

「なんだと……、気が狂ったのか。なんちゅうこった」

呆れ返って、彼は叫ぶ。

「まあ、聞け。議長が来るとなれば、俺が戻ったことが分かっても、代表はそう簡単に手出しはしまい。地区本部を修羅場するわけにはいかないからだ。それに、特別秘書までが生きていたとなれば、たとえ俺が出ていっても、代表は当分の間、表面づら何事もないように振る舞うほかないだろう。一度、代表に亡き者にされた特別秘書がどう出るか。やつは行動を起こす時期を虎視眈々と狙っているにちがいない。そんなとき、俺にKキャンプでのうのうとしておれというのか。大体、Kキャンプのどこに監禁されていろというのだ」

「一度亡き者にしようとしたものが生きていることを知れば、代表はじっとしていまい。代表から行動を起こすだろう。議長に訴えでるかもしれないぞ」

「そうなれば、ますます面白くなる。代表はあの写真を隠しきれず、議長にどう釈明するか、これは見物だ」

「代表がそれで窮地に陥れば、お前にも飛び火する」

「俺は代表の命令に従ったまでだ」

「それで議長が騙されるとでも思っているのか」

「とにかく、その場所に俺がいなければ、チャンスがないのだ」
「なんのチャンスだ」
「分からんのか。このときが議長に近付くチャンスなんだぞ。いま行かなければ、それが消えてなくなるのだ」
「ふん、勝手にしろ……」
彼には山城が考えていることが分かるような気がした。だが判然としないところもあった。それでもそれ以上突っ込んで問い質そうとしなかった。
いま山城は議長をやっつけるチャンス到来と思っているのか、それとも代表に取って代わって新しい代表となるチャンスと思っているのか、のいずれかだろう。だが彼にはどちらでもよかった。
どちらにしろ、一大決戦となるにちがいない。山城の対議長、あるいは対代表との一大決戦は、彼にとって「黒の集団」を潰滅させるチャンスとなるかもしれないのだ。それはそうなるように、彼自身がリードすればよいことなのだ。
これからどうなるかも分からないのに、ハクリも未佐もいると思うと、なぜか、彼は妙に胸が高ぶるのを覚えるのだった。

32

突然、ドアを激しくノックする音がした。
「誰だ……」
代表は声を荒げ、執務机に広げた書類から顔を上げるとモニターに目をやる。誰も写っていない。いや、画面が流れて映像にならないのだ。なぜだ。
手を伸ばす。秘書室に通じるブザーを押そうとしたそのとき、外から開けることができないはずのドアが音もなく開いた。だが開いたドアの陰には人影がない。ドアは一杯に開いたままだ。
「誰だ、そこにいるのは……」
代表は手を伸ばし、ブザーを押しつづける。係員が飛んできた。
「代表、ご用でしょうか……」
「そこに誰かいないか」
彼はドアを指差す。
「誰もいませんが……」
係員は指差すドアの回りを見回り、怪訝な目をして頭を横に振る。
「もういい。ドアを閉めなさい」
係員の後ろ姿がドアの外に消えたのを確かめると、代表はドアの施錠スイッチに手を伸ばす。スイッチを押すまえに、カチリと金属性の音が微かに響く。
ドアの把手が僅かに回るのが見えた。音もなくドアが開く。一人の男が入ってきた。
「あっ……」
特別秘書だった。薄笑いを浮かべている。薄ぺらな顔がふてぶてしく見えた。
「おお、お前か……。どうしたんだ。まだ行かないのか……」
一瞬、驚きの声を発するが、代表は直ぐ、いつもの平静さを装う。
「いいえ。只今、Kキャンプから戻ってきたところです。山城チーフを生け捕りにして連れてきたのですが、途中で事故に遭い、ヘリが空中分解し

てしまいまして……」
薄ぺらな顔が窺うような目付きをして、代表を見ている。
「……」
代表は口を閉じたまま、素知らぬ振りを装いつづける。
「あれは単なる事故ではなく、誰かに時限爆弾を仕掛けられたような感じでした。いま調査しているところですが……」
相変わらず、窺うような目付きだ。
「お前はそれに乗り合せていなかったんだな」
「いいえ……」
「乗っていたのか」
「はい」
「それで……」
「それで？　それでなぜここにいるのか、ですか。それはもちろん、代表への報告を果たすためですが……」
「うん……。それで山城はどうしたのだ。あのやつはどうだったのだ」
「一緒に連れてきました」
「なんだと。いまどこにいるんだ……」
「自分の執務室にいます」
「どういうことだ……」
「……」
薄ぺらな顔が口も開かず、窺うような目付きで、代表を執拗に見つめている。
「もう、いい」
「報告はまだ終わっていませんが……」
「もういい、帰れ」
薄ぺらな顔は動こうとしない。
突然、壁のスクリーンの電源ランプが点滅した。議長が顔を現した。代表は立ち上がって、スクリーンと向かい合う。
「そこにいるのは……」
「秘書ですが、いま帰えらせます」
「いや、君の秘書なら好都合だよ。来週、そちらへ伺うよ。じゃ、そのときに」
スクリーンが消えた。
代表が席に戻ると、すでに特別秘書の姿はなかった。

第四章

３３

代表はまるで狐につままれたような気がしてならなかった。彼には目の前で起きたことがどうしても理解できないのだ。

「あれは幽霊だったのか……」

彼が席に戻ってドアに目をやったとき、特別秘書が入ってきたドアは閉まっており、施錠してあった。特別秘書が帰るとき、ドアを閉めていったのか。施錠は自動的になされたというのか。

もう一度、目のまえの出来事を思い返す。

特別秘書が報告にきて、「山城を生け捕りにした」と言った。

直ぐ山城の所在を探らせるが、執務室はもぬけの殻だというし、山城の姿を見たものもいなかった。それに当の特別秘書もいくら探しても見つからないのだ。

さらに調べてみると、ヘリが戻ってきた形跡がなかった。とすると、やはり時限爆弾が炸裂したのか。だが報告に現れた特別秘書は無傷だったではないか。

もしかしたら、あれは幻影だったのか。いやそうではない。あれは紛れもなく特別秘書本人だった。

一体、なにが起きたのか。

「確か、議長も秘書がいることに気付いていた……」

彼はスクリーンの議長を思い返す。そのとき、議長は秘書がいてもかまわないと言ったのだ。

とすれば、あれは幻影ではない。特別秘書が来て「山城を生け捕りした」と報告したのは事実そのものなのだ。これは間違いない。なのに、ヘリは戻っていない。生け捕りされたはずの山城の姿もない。

ということは、やはり、ヘリは爆発して木端微塵になったということなのか。そしてそのとき、特別秘書も山城も一緒に木端微塵になってしまったにちがいない。

それとも、特別秘書は無事脱出したというのか。山城は……。そんなことがありうるのか。

そんなことがありうるはずがない。ならば、あのときの特別秘書はなんだ。やはり、幽霊なのか。それにしても、来週、議長が来るというのだ。もしあれが特別秘書の幽霊だとすると、議長が来たとき、また、ひょっこり挨拶に現れるかもしれない。そのときはどうすればいいのか。

頭のなかを特別秘書の幽霊が奇妙な笑い声を発して駆けずり回る。なんとか押さえようとすると、するりと身を翻し、消えてしまう。消えたかと思うと、また顔を出す。追っても追っても、つぎからつぎに現れる。幻影が幻影を呼び、頭が次第に混乱していき、ついに、彼はなにも考えることができなくなっていった。

３４

「この男の頭は、どうやら狂いだしているようだな」

ハクリだ。特別秘書とともに代表の執務室へ潜入したのだ。未佐も一緒

だった。そして特別秘書が報告している最中に、代表に乗り移る。
ハクリは代表と一体同化して残り、未佐は特別秘書とともに去った。彼はひとり代表の頭のなかで息を潜め、様子を窺っていたのだ。
実は、特別秘書が代表の執務室を出たあと姿を消しているのも、彼の発案によるものだった。代表を「幻想の淵へ落し込む」ために考えたことだった。
だがほどほどにしておかなければならない。代表が完全に狂ってしまっては使いものにならなくなってしまう。
代表が狂ったと分かれば、議長は訪日を取り止めるかもしれない。これでは折角のチャンスが潰れてしまう。
議長がわざわざ訪日するということは、極めて重要な事柄に係わる用件があるはずだ。それも議長が地区代表と相対して話し合う必要のある問題なのだ。
「一体、それはどんなことなのだろうか」
彼はその席にいる自分を思い、わくわくする。
議長の訪日をどうしても実現させなければならない。これを妨げるものがないか、彼は丹念に辺りを見回す。そして代表の頭がこれ以上混乱しないように、幻影のコントロールをはじめる。
問題は山城と特別秘書だった。いっそのこと、代表の頭のなかから、二人を処分しようとした記憶を取り除き、従来の状態へ戻すのだ。それができれば、二人が代表のまえに現れても問題はない。
そこで、彼は代表の記憶のリセットを試みる。だが全面的にリセットして、すべてが初期値に戻っても困る。すべてが初期値になれば、山城も特別秘書も全部消えてしまう。それではかえって代表にも支障が生じるにちがいない。
代表と山城が問題のない以前の状態に戻るだけでいいのだ。それには問題が生じたここ数日の分だけの記憶をリセットすれば十分だ。こうして、代表の記憶が山城の処分を考えるまえあたりまで遡ることができれば、特別秘書のことも解決するのではないか。
彼は代表の脳内に入り込み、複雑に交差する神経回路や記憶回路をいじりだす。これで果たしてうまくいくかどうか分からないが、これはと思うところに狙いを定め、回路の壁に刻まれている記憶を消していく。
「おい、こんなことしていいのか」
ふと、自分のしていることに疑問が浮かぶ。もしかしたら、回路に刻まれている重要な記憶を消すことになるかもしれない。
彼は「黒の組織」の全容を知りたかった。危険を冒して代表と一体同化を試みたのも、この情報を取りたかったからだ。これまで「黒」と闘いながら、いまだに、敵組織の全容を知らなかった。敵の全容を知らなければ、個々の闘いにおける最適な作戦を立てることはもちろん、これからはじまる「黒の組織」対「天の組織」の全面対決に備える戦略すら考えることができない。すべての作戦が場当たり的になり、戦略もいい加減なものになってしまうのだ。
彼は目を皿のようにして記憶回路を見て回る。
代表の脳には「黒の組織」の全情報が詰まっているにちがいない。全世界の分が詰まっているか分からないが、少なくとも日本地区の分はあるはずだ。これを探し出すのだ。そのためには代表を狂わしてもいけないし、殺してもいけない。ほどほどに弱らせ、抵抗力を奪うだけでいいのだ。
彼は目ぼしいところを見付けては、記憶の一部を再生してみるが、なぜ

かすべてが外れた。時間だけが過ぎていく。
「なんだ、これは……」
突然、聞きなれない音が混じった。
「あっ、危ない」
鋭いビームが走る。強烈な電子ビームか。彼は身を縮め、ビームを避ける。
身中に潜入していることを感付かれたのか。だが彼はまだ代表とは言葉を交わしていなかった。まず代表の身体のなかを調べ、安全を確かめてからと思っていたのだ。
じっと身構え、様子を窺う。ビームは発射されていたが、そのほかにはなにも変化がなかった。
彼はしぶしぶ情報探しを諦め、ビームを避けて脳内から出た。そして代表の胸腔のなかへ下りていく。
彼はあまり動き回らず、しばらくじっとしていようと思った。だが議長が来るまでに、可能なかぎり「黒の組織」の情報を得ておきたかった。その思いが募り、彼はいつの間にか動き出し、辺りを見回しはじめる。そして胸腔をくまなく見て回った。
「あれはなんだ……」
肋骨の隙間に、ボタン状の丸い黒い影が浮いて見える。よく見ると、一つだけではなかった。
彼は手を伸ばし、そのうえを人差し指で撫でる。固くて、不自然にこんもりと盛り上がっている。それも五つ並んでいるのだ。
「一体、なんだろうか……」
指を突っ込んで、取り出してみたかった。だが筋肉のなかに埋め込まれており、簡単に取り出せそうにない。かといって、諦めたくなかった。
中身はなんだろうか。あのなかになにかが隠されているにちがいない。それにしても五つも並んでいるのが気になる。同じものだろうか。それとも、ひとつ一つが別ものなのだろうか。
代表本人が埋めたものだろうか。本人が埋めたものなら、中身がなにかは知っていることだろう。とすれば、なんのために埋めたのか。ペースメーカーのように、なんらかの医療目的で埋めたものだろうか。
彼は耳を着けて音を確かめる。音はなかった。最初のひとつを軽く叩いてみる。重い音が反響する。中はなにかで充填されている感じだ。だが五つの反響音はそれぞれ微妙に異なる。中身は違うらしい。
細い針で突いてみる。押せば引っ込むが、破れない。表面を包んでいる物質は柔らかいが丈夫だ。針を突き刺すことができない。一体、これはなんだ。
彼はますます興味をそそられ、間近に見ようと顔を突っ込む。とくに、変わった形でもなかった。色はチャコールグレイか。表面は柔らかいようで、針さえ受け付けないほど丈夫なのだ。
ひとつを筋肉のなかから引き出そうと指を突っ込むが、筋肉に完全に密着していて無傷では取り出すことはできない。
筋肉に指を突っ込んだせいか、代表は痛みを感じたのか、しきりに胸を触っている。変に気付かれても追い出しを計られても困る。代表に感付かれないために、彼はしばらくじっとしていなければならないと思う。
この際、代表から抜け出て、一度「天の基地」へ戻り、アムンと相談したいと思った。だが折角一体同化した代表から出てしまうと二度と戻られないような気がするのだ。

「ミサはどこだろう……」
彼はミサとの連絡手段を考えているうちに、微睡んでしまう。

３５

ヘリの爆音が近付いてきた。木陰から、山城が草原に出て、手を振る。
ヘリが次第に高度を下げる。ホバリングして草原に着地する。扉が開いて、手に拳銃を持った一人の男が地上に下り立つ。
男は山城に近づき、ヘリに乗るように促す。彼は男の指図に従い、ヘリに近付きステップに足をかけ、開放されている扉から機内に乗り込む。
男はつづいて乗り込み、扉を閉じた。
ヘリは静かに舞い上がる。

３６

「耀くん、一寸、出てきて……」
未佐は山城に近付き、一体同化している耀に声を掛ける。だが彼女の声が聞こえないのか、耀は姿を見せない。
山城の体内に入って、耀を探そうと思った。だがなんとなく気が引けて、彼女はそのまましばらく様子を見る。
「訳が分からん」
耀だった。ぶつぶつ言いながら、彼女のまえに現れた。
「どうしたの……」
「ああ、未佐さん。山城が地区本部へ行くと言うんです。全く、なにを考えているのか。代表を甘く見たら、ひどい目に遇うにちがいないのに……」
「ああ、そうなの……」
彼女はすっかり大人びいた耀をしばらくじっと見つめる。
「でも、どうして未佐さんがここに……」
耀はようやく未佐もヘリに乗っていること気付いたらしい。
「実は……」
そんな耀に微笑みかけ、彼女は特別秘書と行動を共にしていることを打ち明ける。そして代表と会ったこと、ハクリが代表の体内に潜り込んでいること、来週にも議長が来日するらしいことなど、一部始終を告げる。
「え？　ハクリが……」
耀は驚きの声を上げる。
「そうなの。それでわたしがそのことを知らせるためにここに来ている訳よ。分かった。分かったら、山城に教えるのね。わたしはこれから『天の基地』に戻って、アムンに報告してくるわ。ハクリに会ったら、そう伝えておいてね。じゃ、気をつけて。それから、耀くんね……」
彼女はＡＩＤのことを言おうとしたが、口を噤んでしまう。そして手を振り、別れを告げる。

３７

代表は執務机で頭を抱えた。スクリーンに現れた議長がなにを言ったか、

必死に思い出そうとするが、どうしても思い出せないのだ。
一体、どうしたのだ。これまでこんなことは一度も経験したことがなかった。彼は拳で頭を叩いたり、椅子から立ち上がって執務机の回りをぐるぐる回る。
頭にぽっかり大きな穴が開いたようだった。彼は頭の穴の回りをぐるぐる回ってなかを覗くが、なにも思い出すことができなかった。
苛々が募り、拳で天板をなんども叩く。だがなんの効果もない。彼は思い出したように、受話器に手を伸ばした。
いつもなら誰かが電話口に直ぐ出るのに、誰も出ない。三度目の呼び出し音が鳴りだしたとき、受話器が外れる音がした。
「お待てせしました」
特別秘書の声ではない。
「いないのか」
「はい、席におりません」
「戻ったら、連絡するように」
あとは聞かずに、彼は直ぐ受話器を返す。そして連絡を待つ。
直ぐ戻るはずだと思ったが、いくら待っても連絡がない。一体どうしたのだ。特別秘書はどこへ行ったのか。
見知らぬ街に一人取り残されたようだった。人影もなく、次第に闇に包まれていく街には街灯ひとつすらなかった。いままで堅牢不落の城と思っていた執務室がまるで牢獄のように感じられる。こころが沈み、次第になにも考えられなくなっていく。
頭が狂ったのか。彼はなんども頭を叩く。
突然、彼は引き出しから携帯用の小型電子銃を取り出した。額に銃口を押し付ける。そして引き金を引いた。
殆ど感じないくらいの軽い衝撃だった。次第に意識が遠のいていく。そしてやがて彼の頭が机の天板に落ちていった。
執務机にうつ伏せになった。そして彼は意識を失ってしまう。そのまま、数十分、それとも一、二時間か、彼は机に伏せていた。
突然、胸に捩じ切られるような激しい痛みを感じた。と同時に、意識が戻った。
失っていた意識はゆっくり時間をかけて元に戻ると、痛みが蘇った。彼は胸を擦り、痛みに耐える。痛みは徐々に治まっていった。
辺りが一変しているような気がして、彼はゆっくり回りを見回す。机の上に電子銃が投げ出されている。それに机の天板に小さな濡れ跡があった。うつ伏せになっていたときのよだれの跡か。一部が乾いているところを見ると、かなり長時間うつ伏せになっていたのだろうか。
電子銃の銃口を額に当て、引き金を引いた情景が浮かんだ。彼は手を伸ばして電子銃を拾うと、半開きのままになっていた机の引き出しのなかに放り込む。そしてことさらゆっくり引き出しを机のなかに押し込む。
一体、あれからどのくらい経ったのだろうか。彼にはとてつも長い時間だったような気がした。だがほんの短い時間だった。小型の電子銃は護身用で、相手を一時的に失神させて抵抗力を奪うだけで、これには殺傷能力はないのだ。
それよりも、彼には激しい胸の痛みがふたたび襲ってこないか、心配だった。あの痛みはなんだったのか。あまりにも劇的に治まったことも、彼をかえって不安に陥れていった。あの痛みがふたたび襲ってきたらと思うだけで、耐えられない思いがするのだ。

彼はワイシャツのボタンをはずし、そっと胸に手を入れ、痛みを感じた辺りを触る。あばら骨（肋骨）に沿って胸全体を軽く撫でるが、痛みは戻ってこなかった。

胸中央の窪みに触れたとき、指先にしこりのような固い塊の感触を覚えた。その瞬間、夢で見た五つのボタン状の物体がまざまざと目に浮かんだ。

「これはなんだ……」

そっと押す。次第に力を加えていく。鈍痛を感じた。急いで手を放す。

「やはり、あれは本当のことだったのか……」

ふたたび胸に手を入れ、しこりをなぞる。喉元から一〇センチ程下がった辺りに直線にほぼ等間隔で縦に並んでいる。

彼は夢をもう一度思い出す。

あのとき、なぜか目が開かなくなって、それを見た議長はスクリーンから直ぐ消えてしまった。そして不用意にも、ふたたびスクリーンに現れた議長に夢に見たことを話してしまったのだった。

不意に、険しい表情をした議長の顔が甦った。それは夢で見た五つのボタン状の物体のことを話したときのことだ。一瞬だったが、これまで一度も見たことのない険しい顔付きだった。

彼はもう一度議長の顔を思い浮かべる。険しい表情は直ぐ元の表情に変わったものの、そのとき見せた険しさは議長の本心だったにちがいない。

議長が険しい表情をするようなあの五つのボタン状の物体は一体なんなのか。あれにはなにかひとに知られてはならない極めて重大なことが隠されているのだろうか。とすれば、その重大なこととはなにか。そして体内にいつ埋め込まれたのか。

地区代表に選任されたとき、密室でさまざまな儀式が行われた。彼はそのときのことを逐次思い起こす。

儀式では、なによりも増して、組織と議長に対する絶対の忠誠を誓わされた。その一環としてさまざまなことが行われたのだ。

そのとき、確か、麻酔をかけられ、長い間、ベッドに横たえられていたことがあった。意識を取り戻したとき、胸全体に包帯が巻かれていた。しばらくして、包帯が解かれたが、胸中央に数カ所の切開手術跡があり、その上に文字が化けたような図形の入れ墨が施されていた。

「あのときの手術で埋め込まれたのか……」

彼は夢で見たボタン状の物体を思い浮かべる。組織と議長に対して絶対の忠誠を誓ったのに、さらに、得体のしれない異物が知らないうちに体内に埋め込まれていたのだ。これではこの身体はもはや自分の身体ではない。自分の身体でありながら自分とは別のものだった。そんな感じがしてならなかった。

38

「ミサです。報告に戻りました」

「ああ……」

アムンはミサをしばらくじっと見ていたが、執務机から立ち上がると、彼女を隣のテーブルに導き、椅子を勧める。

「実は、ハクリと耀が敵味方に分かれた形で……」

彼女はハクリが地区代表と一体同化したことや代表と対立する山城と一体同化している耀の行動について、最近の状況の一部始終を報告する。

「それでふたりともいまは地区本部ビルにいるということかね」
「はい。いまにも一戦を交えそうなのです」
「ふーむ……」
「それに議長が近いうち日本地区本部を訪るらしいのです」
「え？　本当か……」
アムンは目を丸くして、彼女の顔をまじまじと見ている。
「スクリーンのなかで本人がそう言っておりましたので……」
脳裏に議長の妙に長い顔を浮かんだ。彼女がたまたま特別秘書に付いて代表の執務室に入っていったときのことだ。
「……」
アムンはこめかみに人さし指と中指を当て、幾分うつむき加減でいる。深く考え込んでいるのか、口を開こうとしない。
「あのう……」
とうとう、彼女はしびれを切らして、口を挟む。
「うむ、なんだね……」
返事とは別に、アムンの目は彼女をとらえずに、遥か遠くを見ている。
「目的はなんでしょうか、議長がわざわざ日本を訪れようとしているのは……」
「さあ、ミサはどう思うかね」
「単なる観光じゃないですよね。なにか、重大なことの打ち合わせとか、大事な用事があるのでしょうが、それはなんなのでしょうか。議長自ら日本に足を運ぶとなれば、日本地区に直接関係することにちがいないでしょうが……」
「なるほど……。ミサもそう思うかね……。じゃ、日本地区に直接関わる重大なこととはなんだろうね……」
アムンは試すような目を向ける。
彼女はアムンの目をじっと覗く。澄んだ水を満々と湛えている底なしの深淵のようだ。その目はどこまでも澄んでおり、濁りは微塵もない。
「教えてください。アムンにはそれがなにか分かっているのでしょう……」
自然に彼女の口から突いて出た。
「……」
アムンは口を噤んだまま、じっと遠くを見ている。しばらくして彼女に視線を移す。彼女はアムンの視線を避けるように目を伏せる。だが直ぐ目を上げた。
彼女はじっとアムンの目を覗く。この目はすべてを見通している目だ。遠くを見ていた目にはなにが映っているのだろうか。「黒」の議長がなにをするために来るのか、アムンには分かっているにちがいない。
アムンは微笑む。彼女もつられて微笑んだ。だが彼女にはアムンがなぜ微笑んでいるのか分からなかった。
「あのう……」
彼女はアムンの考えていることを知りたかった。
「ミサ、ハクリとヨウに一端基地に引き上げるように伝えてくれないか。このままでは、ふたりとも連中の内輪もめに巻き込まれてしまう。議長が見えるまえに、ふたりを基地へ引き揚げさせるのだ。いいね」
「はあ……。議長が来るのは、地区の内部抗争と関係があるというのですか。それなら、そばで成り行きを見守るために一体同化しているほうが良さそうに見えますが……」
「議長が地区の内部抗争で来るとは思えないがね。たとえそうだとしても、

内部抗争の情報には危険を冒してまで取る価値はないだろう。それよりもハクリやヨウのほうが大事なんだよ」
「内部の争いが一体同化しているふたりにも危険をおよぼすほど熾烈な争いとなるというのですか」
「多分、最終的には、命の奪い合いになるかもしれないな。どちらかが命を落とすことになるだろう。あの世界では、相手を消さない限り、生き残れないだろうからね」
「そんなことに……。でも、こんなときに、どうして議長がわざわざ来られるのでしょうか……」
「さあ、どうしてかな。議長が地区の内部抗争を止めさせるためにわざわざ来るようなことはないと思うよ。たまたま時期が一致して、そうなったにすぎないだろう。そんなことよりも、議長は対日本地区での戦略や行動計画を見直そうと考えているのかもしれない。それで現場を見て、現体制にてこ入れするか、それとも、一挙に新体制をつくるか、判断したいと思って訪日しようとしているにちがいない。だから、われわれはいま『黒』の内部抗争などにかまけていないで、つぎの段階に備えることだと思うね」
「議長には日本地区での内部抗争が見えていたのでしょうか。それで重大事項の決定のまえに現場視察しようと……」
「多分ね」
「それならなおのこと早く決着をつけておきたいと思うのでは……」
「代表側としてはそう思うかもしれないね」
「それじゃ、代表対山城の戦いが……」
「来訪まえに起きるかもしれないと思うのかね。だったらなおのこと、一体同化しているふたりを早く引き揚げさせることだね」
「もうはじまっているかも……」
「議長が直ぐ来訪すると分かっていれば、代表としてはなかなか手を出しにくいだろうな。間があれば、代表は早めに手を打とうとするかもしれないが……。まあ、相手の出方次第だろう。戦いがいつ起きてもおかしくないから、ミサ、一刻も早くふたりに連絡することだ。いいね。さあ……」
アムンがしきりに促すが、彼女は椅子から腰を上げようとしない。彼女はふたりとどのようにして連絡すればいいのか考えあぐねていたのだ。ことに、執務室に閉じこもっている代表に近づくことは至難といってよかった。代表と一体同化しているハクリと連絡をとるには代表の身体に入り込まなければならないからだ。
「ところで、その山城という男のことだが……」
アムンは彼女が苦慮していることに気付いたのか、突然、話題を変える。
「耀くんが一体同化している男のことですか」
「そうだ……。その男のことだよ」
アムンはひと呼吸置く。そして徐に口を開く。
「どうかしたのですか……」
「このまえ、ミサが机の上に落としていった頭髪のことだがね。ヨウが投げ捨てた例のＡＩＤキッドの内容物のＤＮＡとその頭髪のそれが極めて類似しているのだよ。あの頭髪は誰のものかね」
「そうだったのですか。すると……」
「そうだよ。ヨウはＡＩＤ児じゃないかもしれない」
「え？　そうですか」
「このことをヨウに早く知らせてやりたいと思わないかね」
「……」

「ヨウのお母さんには……」
「木実子さんとはまだ話していないのですが……。そうだったのですか」
彼女は気になってはいたが、耀の出生に関する微妙なことだけに入院中の木実子に尋ねる気が起こらなかった。
「もしかしたら、あの頭髪は山城という男ものだったのではないかな。確認するために、ヨウに会ったとき、直にあの男の頭髪を一本抜いてきて欲しいんだよ」
「はい……」
「これで確かにその男のものだと判明するが、念のために、ヨウの分もチェックもできれば申し分ないが……」
「直に彼の頭髪を一本抜いてきますが、耀くんのは……」
「ヨウのお母さんに会ったときでいいよ。それはそれとして、ミサ、ふたりと連絡をとるように。さあ、早く」
彼女は椅子から立ち上がると、素早く執務室を出て宙に舞い上がっていく。アムンはしばらく彼女が消えていった方向の空を見つめていたが、机に戻ると、ふたたび、こめかみに人さし指と中指を当て、幾分うつむき加減で深く考え込んでいった。

３９

アムンの独り言

地球は一つのシステムだ。システムがシステムとして存在するためには構成する要素要因が相互に結びついて、ひとつの全体としてバランスしていなければならない。
だが地球システムは生きており、つねにダイナミックに変化しつづける。それゆえ、地球システムが全体として完全にバランスする状態を保ちつづけることは難しい。
要するに、地球システムは一つの全体を形成する一方、つねに変化する動態的システムであるということだ。そして動態的であるがゆえに、地球システムはアンバランスに陥りやすいのだ。
かといって、アンバランスな状態のままでは、システムは不安定化し、システムとしての存続はおろか、存在すらできない。そこで、地球システムは自らの存続のために、システムのバランスをめざして自らコントロールし、つねに安定化をめざして修正をほどこしつづけることになる。
いいかえれば、地球システムは変化しつづける一方、つねにバランスをめざして進化しなければならないということだ。これを放置すれば、発散してしまい、システムは分解してしまう。それゆえに、地球システムはつねにバランスをめざす過程にあり、地球システムの時間はバランスをめざして流れているのである。そしてこれを支えるために、地球システムの個々の構成要素要因のすべてがそれぞれ全体システムとしてのバランスをめざすベクトルを有しているはずものである。
こうして地球システムはこれまで何億年何十億年という長い時間をかけて、さまざまな要素要因の相互間に絶妙な役割分担をつくりだし、バランスあるシステムをめざしてきたのだ。そして地球システムも寿命の続くかぎり、そのような歩みを続けることだろう。
ところが、地球上に人類が誕生して以来、地球システムが撹乱しはじめ、おかしくなった。ことに、この数百年、現代科学技術文明が出現してから

一層おかしくなった。

とくに、最近の人類の行為行動は目に余る。地球システムは存続すら危ぶまれる状況に陥り、悲鳴を上げているのに、なんらお構いなく、さらにアンバランスを加速させて平気でいる。一体、どうしたことか。

宇宙にあって、数えきれないほど無数に存在する星のなかで、地球は銀河系にある恒星のひとつである太陽の周りを回る惑星のひとつにすぎない。とはいっても、人類（地球人）のような「高等生物」が生存できる星はそう多くはない。それだけに、地球に棲むものは地球を大切にしてほしいのだ。

だが人類は地球のことを知らないのか、それとも誤解しているのか、地球を貪り食って台無しにしている。人類のうちでも、この数百年数十年の人間（人類）が問題だ。いまを生きている現世本位の人間（人類）が問題なのだ。

彼らは地球システムの時間の流れを逆行させ、アンバランスを増長させている。いまや、人類はアンバランス要因と化し、地球システムに大撹乱を引き起こし、いまや取り返しできないところまできてしまったようだ。

このまま放置しておけば、極めて近い将来、人類は確実に絶滅する。そしていま、一歩一歩絶滅の淵に近づいているのに、人類は目先のことしか目に入らないのか、このことに気付かない。それどころか、人類は自らその歩みを幾何級数的に加速してのだ。

人類が地球上に出現して以来数百万年経つが、約一万年前の農耕革命までは地球の生物生態系のマイナーな一構成員にすぎなかった。だが農耕革命を成就して以来、人類による地球の改変がはじまった。草原や原野を農地に変えた。農業生産の拡大とともに、人口も増え、さらに、交易も広がっていった。

やがて、人類は都市を造り、科学技術を進展させ、産業革命にいたる。この三〇〇年程の間の科学技術の進歩は驚愕に値する。ことに、この数十年の科学技術の指数関数的な巨大化高度化大量化には目を見張るものがあった。

別に、褒めて言っているのではない。それだけ、地球システムのアンバランス要因が巨大化高度化大量化し、極端に増大したということだ。

それはまるで、小さな水槽で飼育している魚が大きく育ち過ぎて泳ぎ回ることもできないくらいになっているのに、さらに大きくしようとしているように見えるのだ。そして大きくなり過ぎた魚は、ついに、水槽を壊してしまい、水が流れ出、あげくの果てに、当の魚も死んでしまうにちがいない。

いま、人類は、このような魚の状態にある。そして地球は小さな水槽のような状況にあるのだ。

地球システムはつねにバランスを保とうと修正を重ねてきたにもかかわらず、この二〇〇年の間に、人類の活動によって、地球システムは取り返すことができないくらい大きくアンバランス化してしまった。そして地球システムはさまざまな問題を抱えるようになった。

ことに、この数十年は巨大化高度化大量化を指向する現代科学技術文明のもとて、地球環境が大きく改変され、さまざまな地球規模の環境問題が出現した。このため、地球システムはいま大撹乱期に突入してしまってい

る。

温室効果ガスである二酸化炭素の大気中濃度が二倍になった。二酸化炭素だけではない。さまざまな温室効果ガスも増え、地球温暖化が急速に進んでいる。

地球温暖化は地上の気温を上昇させるだけではない。異常気候をもたらし、地上の天候を激しく変える。熱波や寒波、干ばつや大雨、強風や竜巻などが増えたばかりでなく、度合いを強め、規模も大きく、ところかまわず襲来する。

だがこれだけでおさまらない。大気環境における気候の変動は海水温や海流変動など海域環境にもいろいろな影響をおよぼす。さらに、これらは地球の自転速度をも変え、地殻や地球内部のマントルにも影響をおよぼす。そして地球システム全体が大きく揺れ動き出すのだ。

また、地球環境では地球規模でさまざまな環境汚染が進んでいる。これらの原因物質にはさまざまなものがあるが、合成や掘削によって新たに地上にもたらしたいわば人為的な各種の化学物質や放射性物質が最も危険である。

これまで人類によって新たに開発された化学物質（化学合成物質）は数百万種類を超える。そのうち、現在、世界中で常時使用されているものは一〇万から二、三〇万種類におよぶ。これらの化学合成物質は大量生産され、さまざまな形で大量に消費され、やがて大量に廃棄されて、大気や水域、土壌へ漏出して広く拡散し、地球環境を汚染していく。

各種の農薬や化学肥料などは直接農作物や土壌に散布されるので、土壌や水域環境を直接汚染することになる。医薬品、食品添加物、洗剤や有機洗浄剤などは排泄物や汚水に混じって下水へ流れ込む。このように、さまざまなルートを通って、これらは最終的に海へ流れ着く。

化学合成物質のなかにはこれまで自然界に存在しない全く新しいものさえ数多い。そのなかには、たとえばＰＣＢなどのように、自然界でなかなか分解されず、海洋に広く拡散していき、いつまでも汚染しつづけるのも多い。また、いくつかの塩素を含む化合物であるフロン（クロロフルオロカーボン）も分解することなく、大気中を成層圏を越えて上昇し、オゾン層のオゾンを破壊する。

汚染原因物質は化学合成物質だけではない。人為的に生み出された放射性物質も、すでに大量に地球環境にばらまかれている。原子力兵器（各種の原子爆弾や原子力潜水艦など）開発過程の実験や原子力利用（原発や医療用、産業用など）の過程で、大量の放射性物質が地球環境へ放出される。原子力の平和利用とされる原発からも大事故のたびに大量の放射性物質が地球環境へ放出され、いまでは世界中が放射能で汚染されている始末だ。

これらは飽くなき人間活動によるものだが、これらの活動を支えるためにはさまざまな原料物質やエネルギーが必要である。これを補うために、世界中いたるところでさまざまな鉱物資源やエネルギー資源が大量に採掘されている。その際にも、さまざまな物質が地上に取り出され、地球環境に漏出し、地球環境を汚染するだけでなく、採掘によって広範囲にわたり地球環境が破壊されてしまうのだ。

地球環境の破壊はこれだけではない。農地開拓や都市建設のための大規模な土地開発では、森林伐採や湿地の干拓などの環境破壊が公然と行われている。

こんなことをいちいち上げていっても切りがないが、今日、巨大化高度化大量化したさまざまな人間活動によって、地球環境が極めて大きなイン

パクトを受けているのだ。

極めて大雑把に見ても、地球温暖化で地球システムは大撹乱を起こしはじめているうえに、さまざまな化学合成物質や放射性物質による汚染で毒漬けされてしまった地球環境では、もはや、「高等生物」である人類の未来はない。

これらの地球環境問題は人類に直接的な被害をおよぼすばかりでなく、地球上の生物にとっての基盤であり、人類の生存の基盤である地球上の生物生態系にも壊滅的な被害をもたらすことだろう。いや、すでに地球生物生態系はいたるところで寸断され、崩壊し出しているのだ。

このような状態にあるのに、人類はなにをやっているのか。高度な文明を掌中にしているのに、なぜ、これを用いてこのような状態から抜け出ようとしないのか。

いまや暴走状態にあるとしかいえない現代科学技術文明は、すでに、人間の手に負えないモンスターと化してしまったのか。人間社会がこんな状況にあるのに、「黒」の連中は一体なにを考えているのだ。自分たちだけは別の存在と思っているのか。

さらに厄介なことは、現代科学技術文明の内包する問題だ。

それは巨大化高度化大量化をたどる現代科学技術文明の非全体性非未来（現世）指向だ。いいかえれば、現代科学技術文明は発散系であるゆえに、全体を形成することはない。また現代科学技術文明そのものが構造的に個別的で専門化を指向するのだ。また、現在（現世）を中心に考えるので、未来を構想することもない。ということは、現代科学技術文明は全体性を指向する動態的地球システムとは相容れないものであるということだ。それは、現代科学技術文明が地球の有限性動態性を無視しているからにほかならない。

それゆえに、現代科学技術文明は極めて歪んだ形で進展しているが、これをさらに助長しているが資本主義市場経済での歯止めなき自由競争における新自由主義的商業主義だ。金儲けのためなら、現代科学技術文明が暴走しようが歪んで進展しようがお構いなしの始末。

一例を挙げれば、たとえば、農作物への遺伝子組み換え技術の応用はどうだ。一代限りの多生産品種とその品種にしか効かない農薬を組み合わせて種子と農薬を独占的に販売して、世界における食糧生産の支配を目論んでいる。これには「黒」の連中も一枚噛んでいるにちがいない

ところで、このような人間活動を仕向け、活動を揺り動かしているのは一体なになのか。地球環境がどんなに損なわれようと、科学技術文明がどんなに歪んだものであろうと、全くお構いなしに行う人間活動はなにに起因しているのか。このような人間活動を行わしめる根源にあるものは一体なんなのか。

このような行動に際して、人間は変だとも、おかしいとも全く感じないのだろうか。変だとか、おかしいと感じながらも、抗することができず、止むに止まれず行動してしまうのだろうか。

そのような行動を起こさせるのは人間の欲望なのか。それとも単に人間の習性にすぎないのか。

われわれは地球の環境保護をめざしてきたが、このような人間がいては、それはまるで笊で水汲みするようなものではないか。

このような人間がこの数十年の間に急速に増殖して、もうじき八〇億人に達する。すぐ一〇〇億人を突破するだろう。世界人口の爆発的増殖は食糧生産のための農業や放牧が盛んになり、森林や草原の農地化がますます

進めれていくことになる。これらの農地化が進めば進むほど広範囲にわたる森林伐採等により地上の生態系は損なわれ、地球環境はますます不安定化していくだろう。

これに地球温暖化による気候変動による干ばつや大雨などの異常気象が重なり、折角農地化された土地は急速に衰え、次第に砂漠化していく。このようなサイクルが常態化してしまう。こうなっては、もはや、地球環境の保護保全はムリだ。地球環境の天敵は人間にほかならないのか。ああ……。

４０

突然、執務机の上で電話がけたたましく鳴った。

代表は思わず椅子から飛び上がった。予期しなかっただけに、心臓が高鳴り、全身に汗が噴き出した。

二度目のベルが鳴った。彼はおそるおそる手を伸ばし、受話器を取る。

「ご用でしょうか……」

特別秘書だった。

「なんだ……」

「連絡するようにと伝言が……」

「……」

彼は席に戻ったら連絡するように命じていたことをすっかり忘れていた。いやそんな伝言したことすら思い出せないのだ。一度引いた汗がふたたび噴き出す。

「そちらに参りましょうか」

「うん……。あとで電話する」

「分かりました」

彼は特別秘書の声を聞きながら、用事がなんだったのか必死に思い出そうとするが、脳は全然反応しない。まるでスローモーションピクチャーのような動作で、彼は受話器を電話機に返す。

こんなことは、これまで一度もなかった。なぜ、特別秘書へ電話した用事が思い出せないのか。脳の一部が突然空白になってしまったのだろうか。

かといって、特別秘書の声を忘れているわけでもないようだ。顔も目に浮かぶ。だがなぜか目に浮かんだ顔が特別秘書のものだと言い切れなかった。彼は自分の記憶に微かに不安を覚え、自信を持って判定することができないのだ。

ふと、顔を上げる。白い壁のようなスクリーンが目に飛び込んできた。議長の姿が浮かんだ。

彼は受話器を取ると、特別秘書を呼ぶ。執務室に一人の男が飛び込んできた。

「おお……」

特別秘書だった。彼の目に浮かんだ特別秘書に間違いなかった。特別秘書への用事が思い出せないのは一時的なもの忘れ現象にすぎないものだと思った。彼はいやそうにちがいないと決め付けてしまう。

「どこへ行っていたのだ……」

「山城を連れてきました」

「山城がどうしたのだ」

「捕まえてこいと……、それで……」

「それで」
「いま、彼は執務室にいますが……」
「そうか……、ところで、議長は……」
彼の口から、不意に「議長」という言葉が飛び出した。スクリーンを見て、目に浮かんできた議長を思い出したのかもしれない。
「いつになりましたか、議長の訪日は……」
「うん？　議長が訪日……」
議長が訪日すると言っていたのか。彼は微かな記憶を呼び起こす。
「いつ訪日するか本部に打診してみてくれ。予定や対応の仕方も頼む」
「早速、打診してみます」
彼は特別秘書の後ろ姿がドアに消えたのを確かめると、大きく息を吐く。
あのとき、議長がここを訪ねると言っていたのか。彼は反芻するように、特別秘書とのやり取りを思い返す。だが議長がわざわざ日本に来るのはなぜか。用件はなんなのだろうか。
それとともに、山城のことが気になった。捕まえてこいと言ったらしいが、そのこと自体覚えがないし、なぜそう言ったのかさえ思い出せないのだ。
やはり、頭のなかでなにかが起こっているのか。それとも単なる健忘症なのか。
ふと、額に付けた電子銃の銃口の感触が蘇った。あのとき引き金を引いたことを思い出した。そして意識を失ったのだ。
「あのせいにちがいない」
引き出しを引き、なかから小型電子銃を取り出す。小さい割に見た目よりもずっしりと重い。右手に持って、彼はしばらく重い感触を楽しみながらいじくり回していた。

41

未佐は地区本部ビルに舞い戻ると、特別秘書を探した。ようやく秘書室を探してなかへ入っていったが、衝立で仕切られた特別秘書のブースは空で、誰もいなかった。彼女は執務机の椅子に腰をかけ、特別秘書が戻るのを待った。
うとうとしかけたとき、男の匂いがした。椅子から急いで飛び退くと同時に、男がどかっと椅子に腰を下ろした。
特別秘書だった。彼女は特別秘書の肩に飛び移る。重量もなく、姿が透明な彼女に特別秘書は気付かない。
男はひょいっと執務机の電話機に手を伸ばすと、受話器を左手に持って、プッシュボタンを押した。
「ただいま代表に会ってきました。実は、一寸、おかしなところがありまして……」
未佐は男の受話器に耳を寄せる。彼女は耳をそばだて、受話器から流れる声に耳を澄ます。
「おかしなところ？　なんだ」
「ご自分がヘリコプターに細工してわたしを亡き者にしようとしたことも、山城チーフを捕らえて処刑しようとしたことも、覚えていないようなのです。それに……」
「ううん……」

「はい。議長が見えることも忘れてしまっているようなのです。それで、わたしに……」
「……」
「多分、わたしを呼んで聞き出そうとしたのでしょう。議長がスクリーンに現れたときに、たまたまわたしも代表のそばにいたものですから」
「代表が最近のことを忘れているんだな。確かか」
「おそらく、九〇パーセント間違いないでしょう」
「一〇〇パーセントじゃないのか」
「ええ、そこまでは……」
「じゃ、試してみようか」
「え？　どのようにするのですか」
「俺が代表室へ行ってみる。代表の会って、反応を確かめてみよう。お前も一緒だ。いまそっちへ行く」
特別秘書の身体がぴっくと動き、受話器を持ったまま立ち上がる。そして執務机の縁を回るようにして受話器を電話機の返した。
特別秘書はそわそわして机の周り歩き回る。
「おい、さあ行こう」
ドアの陰から、太い声がした。山城の顔が覗く。
特別秘書は足早にドアに寄る。
「大丈夫ですかね」
「二人が一緒だから、大丈夫だ。お前も代表をよく観察しろよ。行くぞ」
特別秘書は山城の後を追う。

４２

「耀くん……」
「あっ、未佐さん」
特別秘書が山城に追いついた瞬間、彼女は山城と一瞬一体同化する。そして耀を呼びだしたのだ。
ふたりはそれぞれ山城の左と右の肩に乗り、言葉を交わす。
「そうか。アムンがそう言っているのか……」
彼女はアムンが言っていたことをかいつまんで話して、引き揚げ命令を伝えたのだ。
「そうよ。アムンはなにか危険を感じているようよ」
「でも『黒』の最高責任者である議長に会える絶好のチャンスなのに……」
「議長に会ってどうするつもりなの……」
「対決するのさ」
「誰が……」
「決まっているじゃないか、山城とぼくさ」
「山城が負けたら、耀くんも死ぬことになるのよ」
「分かってる。議長を倒すことができるかもしれないんだよ」
「そしてどうするの……」
「『黒』をぶっ潰すんだ」
「そして……」
「そして……、それが目的じゃないか」
「それが目的なの、そのために命を失ってもいいのね」
「いいんだ、『黒』さえなくなれば……」

「そうなの、耀くんはそれで終わりなの」
「……」
「あ、ここよ。このままでいてね。なかへ入ったら、代表の身体にいるハクリを呼び出してくるからね」
特別秘書がドアをノックする。代表室のドアが開く。
山城も特別秘書のあとに付いて、なかへ入っていく。
代表は執務机で椅子に背をもたげ、小型電子銃をドアに向けて構えていた。一瞬、特別秘書が身を避ける。特別秘書の陰から山城の顔が現れ、代表と対峙する形になった。
「なんだ、お前か。なんの用だ」
代表はまだ右手に電子銃を構えたままだ。
「その銃を……」
山城が手で制しながら、近づく。
「……近づくな。なにしに来た……」
代表は銃に気付いたらしく、一端、銃とともに右手を机の天板に落とす。だがつぎに瞬間、ふたたび、銃を構える。そして立ち上がった。
「……」
一瞬の隙を捉え、特別秘書が代表の横へ飛び寄る。
「お前もそっちだ」
代表は二人を並ばせると、頭から足までじろじろと見る。そして銃を構えなおす。引き金の指が動いた。
「ううむ……、痛い……」
突然、代表の身体が倒れるように前のめりになる。
そのとき、空気が動いた。山城が一瞬身を翻す。山城の身体が敏速に動いた。同時に、手が宙を切る。その瞬間、代表の手から銃が落ちた。
その一瞬を捉え、彼女は代表の身体に入る。ハクリを呼びだしてすぐ飛び出す。代表の身体から出てきたハクリの手に血まみれの小さな物体が握られていた。
「ハクリ、それは……」
「代表の身体に埋め込まれていたものだよ。どうやら爆発物らしい。体内にはまだ四個残っている。やつの身体はいつ爆発するか分からない。気を付けるんだよ。むやみに、そばに近づかないことだ」
「まあ、ハクリ……」
「おい、そこのいるのはヨウじゃないか」
彼女はハクリに耀に話したと同じ内容の話をする。
「アムンが……、そうか。じゃ、すぐ帰ろう。行くぞ」
ハクリはいまにも飛び立とうと身構える。
「待って、ハクリ、耀くんは……」
耀の考えを伝えるが、ハクリは聞こうとしない。
「そうだ。ヨウ、代表の脳神経回路から最近の記憶を削除しておいたよ。これであのヘリコプターに時限爆弾を仕掛けた前後の経緯やその原因となった事柄の記憶は代表の頭から消えてしまっているんじゃないかな」
ハクリと未佐、耀の三人は話ながら、山城を見ている。山城には三人の姿も見えなければ話し声も聞こえない。
山城が銃を拾うと、特別秘書に合図して、銃を手渡した。それから机に俯せになっている代表に目を向ける。それから踵を返し、山城はドアを押す。
耀、ハクリ、未佐の三人も、山城らとともに代表室の外へ出る。

「未佐さん、ハクリと一緒に帰って。ぼくは残る。まだ、山城と一緒に仕事をしなければならないんだ。ハクリ、アムンによろしく」
すぐ耀が姿を消した。山城の身体のなかへ戻ったらしい。
「そうか……」
ハクリは耀が消えた方向を見て、呟く。
「じゃ、ミサ……」
「でも、耀ちゃんが……」
「ヨウは自分の道を行くと決めたんだよ。黙って、見守ってやろう。さあ……」
「一寸、待って、すぐ追いかけるから」
彼女は山城の頭から頭髪を一本抜くと、ハクリを追った。

43

「おい、出たり入ったりするな。うるさい」
いつもの声と違い、甲高い。山城はいささか神経が高ぶっているのを感じた。彼は深く息を吸い込む。
「なにを言うか。帰国命令が出ていたんだが、俺はお前さんのために戻ってきてやったんだぞ……」
耀は代表の胸のなかに四個のボタン状物体が残っていることと脳神経回路から最新に属する記憶が削除されたことを告げる。
「それ、本当か……」
彼は耀の話を半信半疑で受け止める。そんなことができるとは思えないのだ。
「本当だぞ。信じないのか」
「じゃ、なぜ、拳銃を構えていたんだ、われわれに向けて……」
彼はもう一度代表と対峙していたときのことを思い浮かべる。
「知るか、もう一度、試してみるんだな、嘘だと思うなら。代表の記憶に欠落があるかどうかをな……」
「……」
もし本当なら、これからの作戦を全面的に見直す必要がある。場合によっては、議長が来るまえに決着をつけたほうがいいかもしれない。彼は自分で出かけて、本当に代表の記憶に一部欠落が生じているか調べてみたいと思う。
「ただあまり近寄るなよ。代表は爆弾を抱えているんだぞ」
「やはりそうか。あのとき、突然、代表が倒れたな。そのとき、ボタン状物体が胸の筋肉から無理やり取り出されたのか」
「そうだろう。とにかく、代表の胸の爆弾が破裂したとっぱちりを受けて、お前と心中することだけはご免被るからな」
「なにをぬかすか、一度死んでいるくせに……」
「バカ……」
「おい、止めてくれ」
突然、息苦しくなった。耀が心臓を掴んだらしい。彼は蹌く。
「いいか……」
「分かった。俺の心臓のそばに寄るな。もっと離れていろ」
「分かったらいい。これからどうするんだ。いつ、議長が来るか分からないし、もしかしたら、すでに来ているかも……。それに代表がどんな行動

を取るかも分からない。やい、代表に議長と戦わせれば面白いぞ」
彼はやにわに手を伸ばし、執務机の左端に置いてある電話機から受話器を取る。
「ああ、あのな、いますぐ、代表の様子を見てきてくれないか。特別秘書だったら、いつでもあそこへ入れるだろ」
そう言うと、彼は受話器に口を寄せ、小声で、「われわれ二人に対する抹殺命令に関する部分の記憶が消却されたと聞いた」と付け加える。
受話器を耳に付けたまま、しきりに頷いていたが、すぐ受話器を置く。彼は椅子に背をもたげ、目を閉じた。

44

「ただいま戻りましたが……」
「おお、ハクリか。それで……」
アムンは執務机の椅子から腰を浮かす。耀の姿がないことに気付いたらしい。
ハクリは後ろの未佐を振り返る。
「耀くんはあとで……。これが……」
彼女は口を濁した。そして、チャックの付いたポリ袋を差し出す。なかに一本の頭髪が入っている。アムンから採取の要請があったものだ。
「例の男のものかね、ヨウが一体同化しているという……」
アムンはポリ袋を手に取って、じっと見ている。
「はい、その男から採取してきたものです」
彼女はそんなアムンに目を据える。これで耀がＡＩＤ児でないことが決まるのかしらと思うと、ほっとする気持ちの一面、なぜか、悲しかった。
「ミサ、これでヨウがＡＩＤ児ではないとは言い切れないよ。ただ、あのＡＩＤキッドサンプルとの関係がないということになるだけ」
アムンには未佐の気持ちが読めるらしい。
「……」
未佐は口を噤んだまま、下目遣いにアムンを見る。
「それよりも、その男がＡＩＤ児、それもあのサンプルが……。あのサンプルが誰のものか調べる必要があるかな……」
アムンは独り言のように呟き、じっと、空を仰ぐ。
しばらくして、ハクリと未佐が立ったままでいることに気付き、アムンはふたりを執務机横の応接セットへ導く。そして向かいのソファに座っているハクリと未佐に目を向け、まるではじめて見るような目付きでまじまじと見つめる。
「ところで、ハクリが手に持っているものはなにかね」
「あ、忘れていました。日本地区代表の胸の中から取り出してきたものです。多分、爆薬が詰まっているらしい代物ですか……」
一瞬、アムンの手が敏捷に動いた。ハクリが言い終わるか終わらないうちに、ハクリの手のなかから小さな物体が宙に飛んだ。執務室天井の開放されたままの大きな窓から物体は空高く、遠い彼方へ飛んでいく。
光が広がった。つぎの瞬間、爆発音が響いた。
「あ、あれは……」
ハクリと未佐はソファから飛び上がり、爆破したほうに目を向け、ぼう然と佇む。彼方に、ボタン爆弾の爆発の痕跡らしい微かに黒みを帯びた煙

のような塊が漂っていた。
「あれはボタン型時限爆弾だったのですか」
「時限爆弾ではなく、多分、リモートコントロールによって爆発したのだろう」
　アムンは平然と言ってのける。ボタン爆弾には遠くから操作できる仕組みが施されていたのだという。その操作によって、ボタン爆弾はいつでもどこからでも自由に爆破できるらしい。
「リモートコントロールですか。じゃ、操作したのは誰ですか。どこで操作したのでしょうか。ここにわれわれがいることを知っていて爆発させようとしたのですか。これではわれわれに対する公然たる挑戦じゃないですか」
　ハクリはソファに座り直し、口早にアムンに尋ねる。
「ハクリ、落ち着きなさい。議長一行はすでに日本に来ているのかもしれないね。用心しないと……」
　アムンは空に目を向け、一点をじっと見つめている。
「すると……」
　ハクリはアムンが見つめている方向に目を向ける。
「ミサ、ヨウのお母さんたちはまだ病院かね」
　しばらくして、アムンがぽつんと言った。
「だと思います。確かめて来ましょうか……」
「そうだね。誰かがあのふたりを襲うかもしれないから、当分、病院から出ないようにしたほうがいいと伝えなさい。連絡できるかね」
「誰がふたりを襲うのですか。あの大男ですか、それとも……。まさか、議長サイドからの攻撃ですか」
「誰かな、それは分からない。もし、議長がもう日本に来ているなら、その危険があると思うのだ。ミサはそばにいて守ってやりなさい」
「はい……、分かりましたが、耀くんのほうは……」
「ヨウを助ける必要があるときには、ハクリに行ってもらうことにしよう。多分、ヨウには他の手助けはかえって邪魔かもしれない」
「……」
　未佐は口を尖らせる。
「ハクリがいるから、心配はいらない。さあ、行きなさい」
　アムンは静かにきっぱりと言う。
　未佐は恨めしそうな目をハクリに向ける。それから、諦めたように、執務室を出て行き、宙に舞い上がっていった。

45

「ハクリ、まさに、これは『黒』というより、議長からの挑戦状だと読むべきかな」
　アムンはじっとハクリを見ている。
「議長からのですか……。やはり、そうですか……」
　ハクリは未だに信じかねるといった目をしている。
「ただ、われわれがボタン爆弾を手にしていることを知って爆破したというより、代表の胸からそれが取り出されたことに気付いて、爆破しようとしたとも読める……」
「……」

ハクリにはよく理解できないらしい。
「われわれに対する挑戦状というより、単に、代表の胸に埋め込まれているボタン型物体に爆薬が仕込まれていることを誰にも知られたくなかったのかもしれない。それで解体して内部構造を詳しく知られるまえに爆破しようとしたのかな」
「でも、あれは爆発ですよね。取り出されたボタン型物体がどこにあるかも、また、誰が持っているかも分からない状態であっても、爆弾の存在を消すために、とりあえず、爆破してしまおうとしたというわけですか」
「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。その辺のところがよく分からない。だから、とりあえず、用心して、議長からの挑戦状だと思って対応したほうがよいと思うのだよ」
「はい。分かりました」
ハクリは率直に頭を下げる。
「だとして、これにわれわれはどう対応するのが一番いいと思うかね。ハクリはどう考える？　わたしにはよく分からないのだよ、最近の人間の考えることや遣ることが……」
アムンはつづける。
われわれはつねづね、地球環境を保持保全し、美しい地球を維持したいと考えてきた。そして、そうすることが地球上で生きるものたちにとっても一番望むことだと思っていたのだ。
だが人間の活動を見ているうちに、その考えがぐらついてきたのだ。なぜか。
人間が人間同士で相争い、互いに殺し合おうがかまわない。だが地球を貪り食い、ありとあらゆるものを垂れ流し、地球システムを撹乱し、地球環境をすっかり汚し、壊してしまっている。そして地上に張り巡られている生物生態系（エコシステム）もずたずたに引きちぎってしまった。
このような行為は決して許されることではないし、許せない。地球は人間だけのものではないからだ。
地球上の多様で豊かな生態系は、気の遠くなるような長い時間をかけ、さまざまな生き物が命がけでをつくり上げてきたものだ。人間もこの生態系に育まれ、そして生きている、いや、生かされているのだ。このこともわきまえないで、自然（地球環境）征服を根底とする現代科学技術文明を振り回し、わが物顔で地球環境を改変し、人間圏とも人間システムともいうべき人間活動空間を造り上げてきた。世界に広がる大都市群。世界各地を繋ぐ空陸海に張り巡らした交通網。農水業、工業など産業の巨大化高度化大量化した生産設備。巨大な電力網。石油などの化石燃料の大規模生産輸送システムなどなどだ。
ここまでなら、分からないでもない。
だが最近、このような人為的システムでの大事故が相次いでいる。それにもかかわらず、全面的に見直そうともせずに、少しの手直し程度でお茶を濁し、これらを継続して利用しつづけようとしている。それも多くの人びとの安全確保や生活の維持改善をめざしているわけでもなく、単に、一部の資本に利する目的だけなのだ。
さらに不思議でならないことは、経済のことだ。いま、資本主義経済世界では、当たり前のように、永遠の成長を追い求めている。だがこんなことは有限の地球では不可能なことだ。にもかかわらず、成長を追い求めるのは、そうしていなければ、自転車のように、いつも漕いでいなければ倒れてしまうからだ。

いま、世界経済のどこかで、成長しているように見えるものは、なにかの犠牲（資源枯渇など）、誰かの犠牲（低賃金、搾取など）、技術革新（ファッションなども含む）、それにグローバル化などの制度の改変（市場規模の拡大化、規制の撤廃など）というマジックのせいにすぎない。だがこのようなマジックがいつまでもつづくわけがない。

「黒」の試みも、この種の「成長の限界」対策にすぎないのだ。

さらに不可解なことは、世界経済の「成長の限界」対策だ。世界経済を実物経済から切り離し、紙切れ「虚構」経済に変えていることだ。いや、単に、帳簿に書かれた数字だけが踊る経済というべきか。まあ、金融資本主義段階だとかいうようだが……。

そしていまや、世界経済を支えているのは、旧来の実物経済というより紙切れ「虚構」経済となりつつある。マネーゲームが常態化し、経済は投機化していっている。投機経済が世界経済を席巻しつつあるのだ。

とにかく、世の守銭奴はこんなことまでして金をかき集めようとしている。紙幣という紙切れをいくら集めても、どうにもなるまい。帳簿に書かれた巨万の数字も一瞬にしてゼロになってしまうだろう。

こんなことは、世の多くの人たちとは無縁なことかもしれない。いや、九九パーセントは、実際、無縁なことと思い、こんなことは人間の皮を被った一パーセントの魔物がやっていると思っているにちがいない。本当にそうであれば、まだ救いもあろう。だが悩ましいことに、そうとも言えないのだ。悲しいことに、無縁だと思っている人たちも知らずのうちにそれに加担しているとしか思えないのだ。

これまでわれわれは、このような金儲け亡者と縁のない多くの人たちのために、この地球の環境を保持保全し、美しい地球を維持したいと考えてきた。そのために反対勢力のひとつである「黒」に対抗してきた。

だが悲しいことに、このごろ、世界の大多数はそう願っていないように思えて仕方がないのだ。われわれの手助けさえ拒否しているように見える。「黒」をバックアップしているような、いわゆるグローバル企業の「多国籍企業」や「超国家企業」の脚本にもとづき演出する世の流れに、世界の大多数の人びとは過去も未来も忘れ、その流れに身を任せ、ただ流されていくだけなのだ。それなのに、大多数の属する国々（主権国家）もグローバル企業には手を出さず、逆に、彼らの手助けしているようにさえ見える。国民を代表する政治家（国会議員等）や政府機関の官僚のなかにも、まるで彼らの番頭か番犬かのように振る舞うものさえ目に付く。マスコミや評論家などにも太鼓持ちの言動が散見するのはどういうことか。

世界の大多数は地球環境のことなど考えずに、ただひたすら、目の前の現世本位の現代科学技術文明をエンジョイしたいだけなのか。その流れの果てに、破滅の深淵が待っていようとも、ひたすら流れに乗って流されたいと思っているのか。

人間そして人類は、いま、まるで、スカンディナビアの伝説にある「集団で海に飛び込む」レミング（タビネズミ）の話のように、破滅の海へ向かって集団で駆け出しているようにしか見えないのだ。

もはや、われわれには彼らを手助けする余地は残されていないのだか。

アムンは一気にここまで話すと、突然、目を閉じ、深い沈黙に陥った。ハクリがいくら話しかけても、二度と目を開こうとしなかった。

46

「ヨウ……」
山城は珍しく、耀の名を呼ぶ。
「なんだ、ケン」
彼も山城の真似る。
「つぎの闘いはかなり激しいものになるだろう。俺たちはこの辺で、おさらばしよう。もし俺が死ぬことになれば、お前はどうなるのだ。俺と一緒に死ぬことになるのではないか。そうなるまえに、ここから出ていってくれ。お前がいては、俺は思いきって戦うことはできないのだ」
「そうか……」
彼は山城がこんなことを言い出すとは思っても見なかった。山城にこんな優しさがあるとは思わなかった。でもなんとなく寂しかった。また一人きりになるのかと思うと、なにかしら悲しい気分に襲われる。だがいつかはこういうときも来るのだ。
山城は口を噤んだまま、窓の外へ目を向けている。ときどき見上げては、ビルの谷間から僅かにのぞく空を見る。
この男は死を覚悟しているのか。爆弾を埋め込まれている代表にはそばに寄れない。だがそばに寄れなければ、山城には勝ち目がない。取っ組み合いとなれば、それは死を意味する。取っ組み合えば、代表の爆弾が炸裂するにちがいないのだ。
山城はここまで考えているのか。彼はじっと考え込む。
「議長がすでに来日しているとすれば、いま、どこにいるのか。お前はどう思う？」
山城が呟くように、言う。
「さあ、分からん。もしかしたら、このビルのなかにいるかもしれないぞ……」
「本当か。じゃ、ひとつ、探して見てくれないか」
「いやだね、お前はそうやって、俺を外へ追い出そうとしているんだろ。その手にゃ、乗らんぞ」
「いいや、そんな姑息なことは考えない。お前さんはいつでも来たいときに来ればいい。お前さんにはいつもオープンにしておく。本当に、議長がこのビルのどこかに隠れているのではないかと思うんだ。不意打ちを食ったら、アウトだからな」
「分かったよ。じゃ、このビルをくまなくチェックするか」
彼はしぶしぶ山城の身体から出る。未練がましく、ときどき振り返りながら、長い廊下を飛ぶように駆け抜けていく。

（第四巻　完）

この物語はフィクションです。登場する国や団体、組織、個人等は実在するものとなんら関係はありません。

天翔け地這う　第四巻　オセロ作戦２
生野以久男
二〇一三年五月二〇日第一版発行
（c）Ikuo Ikuno 2013
発行所　kinokopress.com
代表　森岡正博
所在地　大阪府堺市学園町一－一　大阪府立大学人間社会学部
　倫理学研究室内
連絡先　www.kinokopress.com 内の連絡先に問い合わせ
本文レイアウト＋デザイン　森岡正博

本書およびＰＤＦファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。
ＩＳＢＮ　なし